

2010
February

2 月

高校版
Volume

6

2 私を育てたあの時代、あの出会い

新採の私が先輩の隣で学んだ「人生を見通した指導」
奈良県立登美ヶ丘高校◎西浦太衛門

4 特集

新課程を機に 現行課程を振り返る

6 学校事例① 福島県立安積黎明高校
新課程を契機に導入期指導の成果を学校活性化に生かす

9 学校事例② 兵庫県立小野高校
揺るがぬ教育方針で新課程での変化を受け止める

12 編集部より 新課程の検討に向けた視点

16 調査データから探る指導のヒント

一定水準の知識があってもその活用は不十分な大学生
Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査報告書」より

17 指導変革の軌跡

18 山形県立鶴岡南高校
生徒の主体性の育成◎生徒が企画するLHRで自ら挑戦する生徒を育てる

22 愛知県・私立名城大学附属高校
導入期指導◎入学時からの徹底支援で生徒の不安をぬぐい学習への意欲を高める

26 鳥取県立鳥取中央育英高校
小中高連携◎学校種を越えた連携が生徒の学ぶ意欲を生み教師の意識改革を促す

30 生きたデータの徹底活用

次年度につなげる総括・引き継ぎと3年生からのデータ収集

34 未来をつくる大学の研究室

クロマグロの特性を解明し
配合飼料の開発から安定供給を目指す
近畿大 水産研究所 滝井健二研究室



38 30代教師の情熱

教科書の外に広がる数学の世界を伝え学ぶ楽しさを感じさせたい
沖縄県立開邦高校◎上江洲 寿

40 VIEW'S REPORT

中学校内容の「学び直し」の課題と実践—英語を中心として—

44 地方公立高校の挑戦

規模や進学傾向の違いを超え、多校連携の活性化を模索
熊本県八校連合進学連絡会

48 VIEW'S SQUARE

本文中のプロフィールは
すべて取材時のものです。
本文中、敬称略。
本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。



新採で、開校2年目の奈良県立高取高校(現・高取

国際高校)に着任しました。当時、同校は2年生から類型が分かれ、文型、理型のほかに国際型2クラスを設けていました。国際という文字を冠した類型・コースは全国でもまだ珍しく、

そのうちの1クラスを私が、そしてもう一つのクラスを私より八つ年上の賀来哲三先生が受け持つことになったのです。

教職1年目で国際型クラスを任されたのですから、今考えたら大変なことですが、私は事の重大さをよく理解していません。たように思います。だから、特に気負いもありませんでした。とはいえ、右も左も分からない新米教師です。職員室で席が隣の賀来先生は身近な、そしてユニークなお手本でした。

例えば、先生は時々、ふと家庭訪問に出かけました。それもわざわざ雨の日に、バイクに乗って。理由を尋ねると「雨に濡れてまで『どや、勉強しとるか?』と聞きに行けば、生徒も保護者も恐縮して指導がしやすくなる」と笑うんです。また、

私を育てたあの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

新採の私が先輩の隣で学んだ「人生を見通した指導」

奈良県立登美ヶ丘高校 西浦太衛門 NISHIURA TAEMON

新採で赴任した学校での体験は、

教師のその後の在り方を大きく左右するものになる。

全国でも珍しい新しい類型のクラス担任という重責を担いながらそのプレッシャーに圧されることなく、

進路指導の本質を学んでいった奈良県立登美ヶ丘高校の西浦太衛門先生。

それはいつも隣に、自由なスタイルで「生徒のために」を追求する1人の先輩の存在があったからだ。

来校した他校の先生に、「国際型の生徒は学校では英語しか話さない」と言い、事前に打ち合わせした生徒たちに「Would you like some tea?」とお茶を出させ、廊下で「Hello」とあいさつさせる。相手が驚く様子を見て生徒と大喜びするんです。多忙の中でも笑い声が絶えなかった職員室の明るさは、賀来

先生の人柄によるものでした。賀来先生は経験のない私にも、「これどう思う?」と気軽に意見を求めてきました。私は、先生の期待に応えたいと思いました。だから、隣の席で「国際型の生徒に合った学習記録表があったらええなあ」と先生がつぶやくのを耳にすると、翌日には試作版をつくり「こ

れ、どうでしょう?」と見てもらいました。私の拙い案を先生は「面白そうやんけ」と喜んでくれました。賀来先生がつぶやくアイデアを形にすることを繰り返して、私は鍛えられました。賀来先生が最も力を注いでい



先輩教師の言葉

生徒の成長を私自身が楽しんでいました

奈良県立桜井高校 KAKU TETSUZO 賀来哲三



高取高校に赴任したのは開校2年目、目玉となる国際

理解教育が本格的に始まる年でした。ただ、それが何を指したもののなか、正直、私はよく分かかっていませんでした。物理担当の私は、授業で彼らを教えることもない。国際型の担任としてどんなクラスをつくるのか、手探りの状態でした。私自身、新採の教師のような気分だったので、西浦先生に対しても「一緒に頑張ろう」という気持ちでした。生徒との接点をつくらうと、英語の勉強会を放課後に開き、一緒に勉強しましたが、その教材づくりでも英語科の西浦先生に力を借りました。私が、「こんなものがあるといいなあ」と言うと、翌日にはつくってくれます。とても助かりました。進路の手引きも、皆で企画を考え、西浦先生がそれをうまく編集し



たのは、国際型の生徒の進路指導でした。賀来先生は「国立A大を退官して私立B大に赴任した教授と話したら、A大の大学院と強いつながりがあることが分かった。B大はキミの将来の目標に合っていると思うよ」と足で稼いだ情報を基に生徒と面談していました。それは、大

賀来先生の言葉で、生徒が一変し、大きく伸びる姿を私はいくつも目にしてきたのです。だから、賀来先生に進路の手引きの制作を任せられた時は、外が暗くなっていることにも気が付かず、校長から「電気ぐらい付けなさい!」と注意されるほど没頭しました。



生徒は、教師の働き掛け次第で大きく変わることに、すなわち、高校教師という仕事の面白さを教えてもらった気がしま

す。実際、高取高校の国際型からは、大企業に属さなくとも、通訳や貿易など国際社会で働く人材が何人も出ました。これは誇るべきことです。生徒の人生を見通した賀来先生の指導は、私の指導の大きな柱となりました。志望大合格も大切だけど、そこに至る過程に多くの学びがあり、結果はどうであれ、そこで身に付けたものこそが、その先の人生でも財産となる——。

今、私は生徒にそう話しています。そして、例えば勉強一辺倒で難関大を目指すような生徒たち



西浦先生とよく話したのは、「生徒は我々の想像を超える可能性を持っている」ということです。例えば、かつて私が勤めた学校で、運動部の主将を務めていた生徒が「先生、どこか自分に合う大学はないですか」と言う。彼の成績は学年でも下の方。「生き物が好き」という彼に、私は地方の私立大で微生物を研究している教授を紹介しました。その生徒は、素直な性格が研究に合ったのか、学問の面白さに目覚め、つい先日、ドイツの大学で博士号を取りました。現地では、東京大大学院出身の研究者と机を並べているというから痛快です。

今、私は生徒にそう話しています。そして、例えば勉強一辺倒で難関大を目指すような生徒たち

こういふ例は結構あるんです。これくらい生徒は変わるんです。進学校の生徒かどうかなんて関係ない。だから、固定観念にとらわれて、ただ難易度の高い大学に入れさえすればよいというのは進路指導とはいえません。生徒を見て、「この生徒がこんなことをやったら面白い」と、教師自身も楽しみたい。

右 かく・てつぞう 理科。十津川高校を経て、高取高校へ。同校で13年間勤務。その後、五條高校を経て、現在は桜井高校の教壇に立つ。
左 にしゅうら・たえもん 英語科。高取高校での6年間の勤務の後、桜井高校、室生高校(04年に榛原高校と統合)、榛生昇陽高校として開校を経て、現在、登美ヶ丘高校進路指導部長。

私も西浦先生も若かったあの頃、一人前の教師としての力量があったかどうかは怪しいものです。ただ、目の前の生徒を何とかしたいという覚悟だけは確かにありました。

新課程を機に 現行課程を 振り返る

2013年度から順次、全面实施となる新学習指導要領（以下、新課程）。

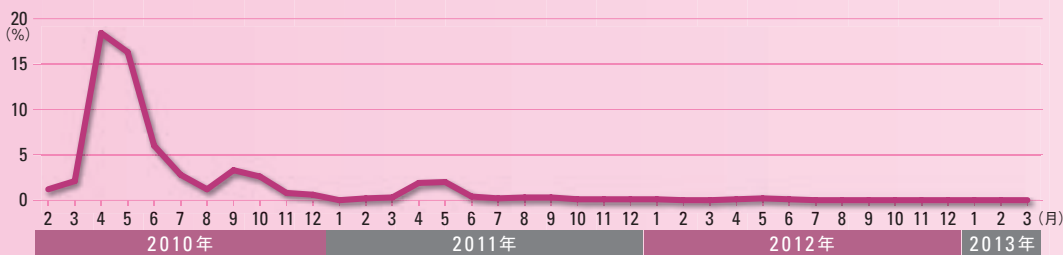
各校では新課程に向けた検討が進みつつある。

新課程は、「現行課程と断絶しているのではなく、連続したものである」と理解し、まずは現行課程での取り組みを振り返ることから始めたい。

Q. 新課程を契機に「現行課程の総括をする必要がある」と感じる度合い



Q. 新課程に関する、学校内での本格的な検討時期



ベネッセコーポレーション「新課程に関するアンケート」(2009年7月調査)、有効回答数1489校

現行課程は旧課程から大幅な改訂があったため、各校ともさまざまな取り組みを始めた。その総括を行う必要があると、半数以上の学校は考えている。更に、新課程に向けた検討は**2010年度前半に始める**とする回答が多かった。

新課程スタートまでのスケジュール

	中学校	高校	大学入試	高校での取り組み
2009年度	<ul style="list-style-type: none"> 総則等、数学、理科の先行実施 	<ul style="list-style-type: none"> 周知徹底 教師全員に学習指導要領の冊子配布 		<ul style="list-style-type: none"> ◎高校の新課程のポイントを整理 (本誌09年2月号特集参照) ◎全教師に配布された「学習指導要領」の内容把握 ◎「総合的な学習の時間」の見直し ◎道徳の全体計画立案
2010年度		<ul style="list-style-type: none"> 総則等の先行実施 		<div style="border: 2px solid #e91e63; padding: 5px;"> <p>現行課程の振り返り (今号)</p> <p>〈学校事例〉</p> <p>「現行課程」と「共学化」に対応した導入期指導と45分授業を総括</p> <p>▶ 福島県立安積黎明高校 P.6参照</p> <p>多様な教育活動を1つの軸にとらえ直し、その方針を揺るぎないものに</p> <p>▶ 兵庫県立小野高校 P.9参照</p> </div>
2011年度			<ul style="list-style-type: none"> 2015年度大学入試センター試験の出題教科・科目発表 (時期未定) 	<ul style="list-style-type: none"> ■小中学校の指導内容と生徒の学習実態を把握 <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムの実態 ・授業の実態 ・生徒の学力実態 ■学校の目標の再設定 ■新課程の具体的対応 <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム、シラバス検討 ・指導内容・方法の見直し
2012年度	<div style="background-color: #e91e63; color: white; padding: 5px; text-align: center;"> 新課程 全面実施 </div>	<ul style="list-style-type: none"> 数学、理科の先行実施 	<ul style="list-style-type: none"> 2015年度個別大学入試科目発表 (時期未定) 	<ul style="list-style-type: none"> ■入試対応 <ul style="list-style-type: none"> ・大学入試センター試験の出題教科・科目への対応 ・各大学の出題科目に合わせた対応 ・「活用」型入試問題への対応 ・「高大接続テスト」への対応
2013年度		<div style="background-color: #e91e63; color: white; padding: 5px; text-align: center;"> 新課程 全面実施 (学年進行) </div>		<div style="background-color: #e91e63; color: white; padding: 10px; text-align: center;"> 新課程全面実施 (学年進行) </div>

新課程を契機に 導入期指導の成果を 学校活性化に生かす

現行課程施行時に「共学化」という変化も経験した福島県立安積黎明高校。生徒の変化に導入期指導と授業時間の変更で対応し、一定の成果を上げた。新たな課題への対応を進める今、新課程を更なる飛躍の契機ととらえている。

「現行課程」と「共学化」 二つの課題への対応を迫られる

「安積女子高校」から「安積黎明高校」に改称し、共学となったのは2001年度のことだった。現行課程が始まった03年度には3学年共によりやく男女共学になったばかりで、この時期、同校は「現行課程への対応」と「共学化への移行」という二つの課題に対応する必要があるのだ。

進路指導部の伊東光司先生は、03年度以降に入学してきた現行課程の

生徒に対して、ある質の変化を感じていた。それは、基礎的な学力が落ちてきているということだ。

「3桁の簡単な計算でもミスをする生徒が増えています。恐らく、中学時代までに反復学習をあまりしていなかったからではないかと思えます。出来るだけ早い段階で、高校での学習に耐えられるだけの基礎学力を身に付けさせることが課題でした」

また、進路指導部長の遠藤修先生は、学習に受け身な態度の生徒が増えていると感じていた。

「『与えられたことしか勉強しない』という生徒が目立つようになりました。課題を出せばきちんと解いてくるのですが、それ以上の発展的な学習に自ら取り組もうとする意識が低いのです。生徒に対して、単に教科を教えるだけではなく、学び方や学ぶ姿勢も教える必要があります。』

遠藤先生は、受け身な姿勢の生徒が増えたのは共学化の影響も大きいと話す。かつて福島県の県中学区では、男子校では安積高校が、女子校では安積女子高校がトップ校に位置

付けられていた。それが01年度に両校が共学化されて以降、学力最上層の生徒や、中学校で強いリーダーシップを発揮していたような生徒は、安積高校を選ぶケースが顕著になった。一方で安積黎明高校には、まじめで素直ではあるのだが、受動的な生徒が増えてきたというのだ。

「生徒の基礎力を固めると同時に、自ら学ぶ姿勢を身に付けさせなくてはならない」。現行課程のスタートと共学化を起因とする生徒の質の変化に対応することが、当時の同校の切実な課題となっていた。

福島県立安積黎明高校

◎安積郡立安積実科高等学校として創立。1948年に安積女子高校となり、2001年度に共学への移行と共に名称を安積黎明高校に改称。福島県東部の郡山地区を代表する進学校で、部活動も盛ん。コーラス部は全日本合唱コンクールで30年連続金賞受賞。

設立 1911(明治44)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 (1学年) 約320人

09年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は東北大、千葉大、東京学芸大、東京農工大などに計188人が合格。私立大には、青山学院大、慶應義塾大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ398人が合格。

住所 〒963-8017 福島県郡山市長者 2-3-3

電話 024-932-0443

WEB PAGE <http://www.asakareimei-h.fks.ed.jp/>

45分授業と導入期指導で 自学自習力の向上を図る

同校が、現行課程と完全学校週5日制に対応するために工夫したこととして、時間割を5分×6コマから、45分×7コマにしたことが挙げられる。当初はコマ数の確保が目的だったが、生徒の学習習慣を定着させる上でも有効だったと、伊東先生は説明する。

「低学年ほど、国数英のコマ数を多めに設定しています。コマ数が増えれば、生徒がその教科の予習や復習に取り組む機会も増えます。基礎学力の定着に課題のある本校にとって、学びを確実に習得させることに

結び付けられるという効果もありました」

また、生徒の自学自習力の向上を目的に、同校が05年度から開始したのが、3期に分けて行う導入期指導だ（*）。

まず、第1期は入学前指導となる。福島県の高校入試はⅠ期とⅡ期に分割して実施する。Ⅰ期入試合格者は2月に決まるため、高校入学までに2か月の期間がある。そこで、合格内定者に対して国数英の課題を課し、課題テストを行うことにした。入学日まで生徒の学習への意識を継続させようというのである。

また、3月下旬には、卒業生を招いて進路講演会を開催。入学予定者を前に、高校生活へのアドバイスや大学生活について語ってもらう。高校生活、更にはその先にある進路に対する意識・意欲を喚起させるのが目的だ。

第2期は入学直後に始まる。4月に「特別指導」の日を設け、シラバスの使い方や教科指導の方針を説明する。また、予習→授業→復習の流れ

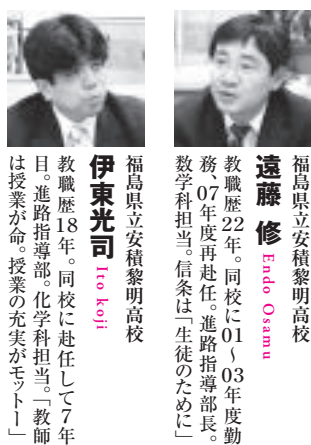
れに沿った学習に取り組みせながら、高校生として求められる学習方法を体験させる機会も設ける。

入学時には「学習プロセス」という冊子を配る。この冊子を見ながら、生徒は「学習記録票」に1週間

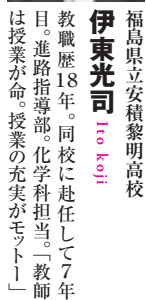
の計画を立てた上で、毎日の授業や部活、家庭学習、睡眠時間を記録する（図）。週末には1週間を振り返っての反省などを記入して、担任に提出する。これは、学習習慣の定着を図ると共に、自己管理能力を高める

ことを狙いとしたものだ。

そして、第3期に当たる1年生2学期から2年生の夏休み明けにかけては、進路意識の醸成に力を注ぐ。「大学・講座研究レポート」を課し、社会人を招いての対話形式の進路講演会を開催するなどして、高校卒業後の自分を具体的に考



福島県立安積黎明高校
遠藤 修 Endo Osamu
教職歴22年。同校に01～03年度勤務。07年度再赴任。進路指導部長。数学科担当。信条は「生徒のために」



福島県立安積黎明高校
伊東光司 Ito Koji
教職歴18年。同校に赴任して7年目。進路指導部。数学科担当。「教師は授業が命。授業の充実がモットー」

図 学習記録票

11月15日～11月21日 (記入例)

学習の目標	今週の行事	予定(11/14～11/20)														定額学習実働時間(分)			
		日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	実	計	実
英語のリスニング力を高める。																90	270	90	270
数学の基礎知識を定着させる。																120	360	120	360
国語の読解力を高める。																100	300	100	300
理科の基礎知識を定着させる。																120	360	120	360
社会科の基礎知識を定着させる。																90	270	90	270
英語・数学 は定着した ニューズ等																90	270	90	270
反省・感想 欄に記入した ニューズ等																90	270	90	270
合計																900	2700	900	2700

05年度から開始した「学習記録票」。当時は予定と実績を併記する形式だったが、改善の結果、現在は予定のみを記入し、実績は反省・感想欄に記入するようにしている

*本誌07年10月号「指導変革の軌跡」参照

えさせる。

「導入期指導では、教師が少し手厚いぐらいに面倒を見ながら、生徒の学習習慣の定着を図っていきま

す。しかし、やがて教師から言われなくても、自ら学びに向かう生徒を育てていくことが目標です。例えば、『学習プロセス』の提出を課しているのは、1年生の間だけです。2年生以降は、自分で計画を立てて学習に取り組むようにさせています。1年生のうちに『計画を立てて実行する』という経験を積ませておけば、後はたとえ一時的に生活のリズムが崩れることがあっても、自分で立て直すことが出来るようになるものだからです。最初は教師が手厚く面倒を見ながらも、徐々に生徒の自立を促していくというのが、本校の導入期指導のスタイルです」(遠藤先生)

新課程をきつかけに 学校の活性化を図りたい

こうした同校の取り組みは、「生徒を手厚く指導しながら、学力保障・進路保障をしてくれる学校」として、地域からも高い評価を受ける

ようになった。その一つの表れが、男子の入学希望者の増加だ。女子校から共学に移行した多くの公立高校が男子生徒の確保に苦しんでいるのに対して、同校では男子の入学者数が女子の人数とほぼ等しくなってきた。

ただ、新たな課題も浮かび上がっている。「安積黎明は生徒の面倒見がよい」という評価が高まりすぎたせいか、受け身な態度の生徒の入学が更に目立つようになったというのだ。

「『安積黎明高校に入れば、しっかりと指導してくれる』という印象からか、年々、まじめでおとなしい生徒が増えてきているように感じます。逆に、強いリーダーシップや知的好奇心、豊かな発想力で、学校やクラスに刺激をもたらしてくれる生徒が少なくなりました。生徒の均質化への対応が、今の課題です」(伊東先生)

そこで、同校が力を注いでいるのが、学校行事や部活動の活性化だ。同校のコーラス部は全国屈指のレベルにあり、全日本合唱コンクール高等学校部門において30年連続で金賞

を受賞している。この影響からか、コーラス部に限らず、学校全体で合唱が盛んだ。「校内合唱コンクールでは、普段は恥ずかしがり屋の男子生徒たちも一生懸命に歌う」(遠藤先生)という。また、近年では男子の部活動も活発になり、野球部やサッカー部などが好成績を収めるようになってきた。「学校を活性化させ、他の生徒をぐいぐい引っ張ってくれるような生徒を育てたい」というのが、同校の思いだ。

そしてもう一つ、同校が学校変革の契機にしたいと考えているのが、13年度に始まる新課程だ。

現行の学習指導要領は、「総合的な学習の時間」に代表されるように、学習や探究活動に主体的に取り組む生徒の育成を狙いの一つに据えていた。しかし、現実には、義務教育での学習内容の3割削減の影響もあり、高校現場は基礎基本が定着していないまま入学してくる生徒への手立てに追われていた面があることが否めない。

「その点、新課程では中学校での授業時数や学習内容が増えるため、一定の学力をあらかじめ備えた生徒

が高校に入学してくるようになるのではないかと期待しています。私たちは、高校教育として本来行いたかった、知識の活用为重点を置いた授業や探究的な活動に取り組みやすくなるでしょう。新課程をきつかけに、高校入学時の生徒の実態を正確に把握し、今まで成功している導入期指導によって学習習慣の定着や自学自習の力を付けながら、生徒が自発的に発展的な学習に取り組める環境をつくり出したいと思います。45分授業では時間が足りなくなる教科が出てくるかもしれません」(伊東先生)

同校が新課程への対応を本格的に検討するのは、これからとなる。数学、理科で新課程での指導が先行実施されている中学校の指導の状況や、新課程が大学入試に及ぼす影響などを、注意深く見守る必要があるからだ。ただ、具体的な詰め作業は今後の課題だとしても、同校ではこれまでの教育活動を振り返り、成果が上がった取り組みを継承しつつ、更に深化させていくために新課程を活用していくこうとする姿勢を明確にしている。

学校事例 2

兵庫県立小野高校

揺るがぬ教育方針で 新課程での変化を 受け止める

1年生からさまざまな行事や活動に全力で取り組み、生徒の進路意識を醸成している兵庫県立小野高校。現行課程の中で、試行錯誤を積み重ねてきた教育活動の軸は、新課程になっても変わらないという。

学校行事や部活動にも 全力で取り組みさせる

兵庫県の南東部、北播磨地域に位置する小野高校は、毎年100人以上の国公立大合格者が輩出する進学校であり、当然、生徒のほぼ全員が大学進学を希望している。

だが、3学年主任で同校勤務17年目の木村篤志先生は、「本校が取り組んできたのは、大学合格という結果だけでなく、日々の授業、部活

動、そして学校行事も重視した指導です」と語る。

「授業、部活動、生徒会活動、学校行事といったそれぞれの活動を通じて、人間としての幅や興行きのある生徒を育てたいのです。その方が大学進学後あるいは社会に出た後に伸びる人物になります。現行の学習指導要領で『生きる力』という概念が初めて出てきましたが、そういう意味では本校は現行課程施行以前から、生徒の『生きる力』を育むこと

を大切にしてきたと言えます」

木村先生によれば、小野高生の3年間是非常に多忙だという。登校時刻は8時15分だが、朝学習が8時10分に始まるため、それに間に合うように生徒は登校する。「あいさつ、清掃、時間厳守」を生活指導の3原則として徹底する同校では、遅刻者数は1日平均1人以下と少ない。

授業は2002年度から、現行課程や学校週5日制への対応として、従来の50分×6コマの授業時間・コ

兵庫県立小野高校

◎1902(明治35)年、兵庫県立小野中学校として開校。普通科(各学年6クラス、うち1クラスは科学総合コース)、商業科、国際経済科(各学年1クラス)を設置。創立以来の校是である「明き浄き直き 誠の心」をその基本精神に文武両道を追求している。

設立 1902(明治35)年

形態 全日制／普通科・商業科・国際経済科／共学

生徒数(1学年) 約320人

09年度入試合格実績(現浪計) 国公立大には、東京大、京都大、大阪大、神戸大、岡山大、広島大など115人が合格。私立大には、上智大、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大など延べ593人が合格。

住所 〒675-1375 兵庫県小野市西本町518

電話 0794-63-2007

WEB PAGE www.hyogo-c.ed.jp/~ono-hs/topframe.htm

マ数を、45分×7コマに変更した。授業についてもチャイムと共に開始する「時間厳守」を原則としており、自身の濃い45分間となっている。

また、コマ数が増加した分、1日当たりの総授業時間は増えたが、「文武両道」を掲げている同校では、始業時間を繰り上げることで、部活動に影響を与えないようにした。

そして、文化祭や体育大会、コーラス大会といった学校行事も、全校で大いに盛り上がる。体育大会の目

玉は学年對抗綱引きにおける応援合戦で、3年生の団結力を目の当たりしながら、下級生は仲間と助け合い励まし合うことが、集団としての大きな力になることを実感する。

同校の特徴は、単に生徒に多様な活動をさせているということだけではなく、それぞれの活動に全力で取り組みさせていることだ。2学年主任の後藤司先生は次のように語る。

「例えば、講演会の後に書かせる感想文一つとっても、生徒がおぼろりの文章を書いてきたら、書き直しを指示します。手抜きを許さないので。ですから卒業生に高校3年間の感想を聞くと、『とにかく忙しかった。でも充実していた』という答えが返ってきます」

多様な仕掛けによって 自ら学び考える力を育成

このように、授業のみならず、学校行事や特別活動にも力を注ぐ小野高校だが、教師は「個々の実践を単発の取り組みで終わらせていては駄目。個別の活動を効果的に結び付けながら、生徒の『生きる力』や『自ら学び考える力』を育んでいくこと

を、常に意識しながら指導に当たっている」と、口をそろえて話す。

例えば、進路指導がそうである。同校では入学時に生徒に志望校を尋ねると、半数以上が地元の神戸大を挙げる。その理由は、「他の大学を知らないから」だ。そうした生徒たちが進路についての広い視野を獲得するために、同校では多様な仕掛けを幾重にも巡らせている（*）。

まず、導入期指導として入学時に行われる集団宿泊訓練では、生徒自身が書いた「なぜ小野高校に入学したのか」という作文を基に、班に分かれてディスカッションし、発表する。学習への見通しや目的意識を持たせると共に、互いに夢や志を語ることで刺激を与え合うことを狙っている。

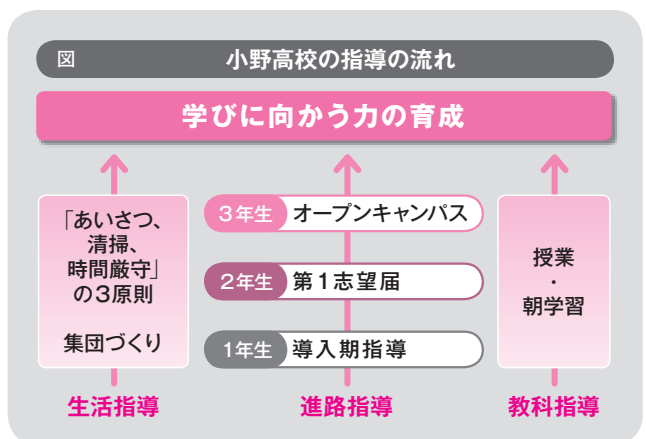
更に、1・2年生では、社会人を招いての特別授業や大学出張講義、卒業生を囲む会、進路講演会、企業・大学訪問、生徒自身が情報収集をしてレポートにまとめる職業研究など、進学やその先の職業について考えさせるための仕掛けを次々と展開している。

こうした中でも教師が「手応えを

感じた」と振り返るのが、08年度と09年度に、2年生を対象に実施した「東京大学見学ツアー」だ。夏休みに希望者を募り、東京大、早稲田大、慶應義塾大のキャンパスや施設を、同校出身の学生のガイド付きで見学する。夜には宿舎に同校出身の東京大の学生を招き、大学生活や受験について質問する場も設けられた。

「本校の場合、成績最上位層の生徒でも、京都大志望者が多く、東京の大学まで視野に入っていない。結果的に地元の大学に進学するとしても、広い視野を持った上で、自分が進むべき道を決めてほしい。そうした思いでこのツアーを実施しました。09年度の参加者は約20人でしたが、そのうちの何人かは『ぜひ東京の大学に進学したい』と言い出しました。中には東大生の先輩をつかまえて、ずっと質問攻めをしている生徒もいました。やはり生徒に直接現場を体験させるといのは影響が大きいですね。また、ツアーを経験して高い進路意識を持った生徒が、クラスのほかの生徒に与える影響も見逃せません」（後藤先生）

そして、2年生の3学期には、自



分が志望する大学名と学部学科名、志望する理由を書き込んだ「第一志望届」の提出が義務付けられている。この「第一志望届」を基に、「なぜこの大学・学部なのか」ということについて、担任と生徒が納得いくまで何度でも面談を繰り返す。これに加えて09年度は、3年生進級直後に、学年主任の木村先生が生徒全員と志望校選択について話し合う学年主任面談も設けられた。

「もし進路について何の指導もしないまま、いきなり2年生の3学期

*本誌05年2月号特集参照



兵庫県立小野高校
辻 祐子 Tsuji Yoko
教職歴26年。同校に赴任して10年目。学年担任。「Where there's a will, there's a way.」



兵庫県立小野高校
後藤 司 Goto Tsukasa
教職歴27年。同校に赴任して12年目。2学年主任。大切にしている言葉は、「玉磨かざれば光なし。」



兵庫県立小野高校
木村篤志 Kimura Atsushi
教職歴27年。同校に赴任して17年目。3学年主任。「明るく、へこたれず、自ら考える」がモットー。

になって『第一志望届』を提出させたとしたら、生徒は適切な志望校選択が出来るわけがありません。入学時から進路意識の醸成を目的とした数々の取り組みを積み重ねてきたからこそ、生徒は確かな志望動機に基づいて『第一志望届』を書くことが出来るようになるのです。また『第一志望届』を基に行う面談も、より深く掘り下げることが可能になります。このように、本校では個々の活動を絡み合わせながら、生徒を引き上げていく指導を心掛けています」(木村先生)

10分間の朝学習で 自信を積み重ねる

同校の取り組みでもう一つ紹介したいのが、毎日8時10分から10分間行う朝学習だ。英語科担当の辻祐子先生は、朝学習を「生徒が自主的に学びに向かう意識を育てる絶好の機会」だと話す。内容は学年ごとに異なるが、07年度入学生(現在3年生)は1・2年生の間、辻先生の指導の下、英語のサブリーダー(副読本)の読書に取り組んだ。1年間で課題図書を10冊設定。更に課題図書以外にも各教室に40冊ほどサブリーダーを配布し、課題図書を読み終えた生徒はその中から好きな本を選んで読んでよいことにした。

「生徒が『自分は英語の本を読んだのだ』という達成感を持つことが大切だと考えました。そこでテキストは、古典的な文学作品や自伝など、人間の在り方、生き方を考えさせる作品を中心に選びました。読後は英語で感想を書かせ、その記録をファイルさせました。すると1日

10分間の読書でも、ファイルを読み返せば、自分が積み重ねてきた成果が実感できます。その実感が励みになり、『もっと読みたい』という意欲がわく。挫折しそうになっても、他の生徒の姿を見て、もう少し頑張ろうという気持ちになる。最初は『させられている学習』だった読書が、やがて『自ら進んで取り組む学習』へと変わっていくのです」

課題図書の総仕上げは『ハリー・ポッター』だ。世界的な人気作品の中から1冊でも読了できれば、生徒にとって相当な自信になり、自慢出来るのではないかと辻先生は考えた。辻先生の期待は見事に当たり、生徒たちは夢中になって『ハリー・ポッター』に取り組み、ほぼ全員の生徒が完読したという。

生徒の自信は多面的に能力を評価することで促進されているという。「GTECのように別の学力尺度も取り入れながら、多面的に評価をすることで、今まで英語があまり好きでなかった生徒にも自信を与えるきっかけができました」(辻先生)

新課程になっても 変わらない基本スタンス

小野高校は、集団の力を活用しながら、さまざまな活動を有機的に絡め、生徒の生きる力や自ら学ぶ力、未来を展望する力を育てようとしている。木村先生は「新課程でもこのスタンスは変わらない」と話す。

「現行課程に移行する際にも、『総合的な学習の時間』の導入など枠組みの変更はありましたが、本校として大切にしてきた指針は変えませんでした。今回もカリキュラムなどの対応は必要になりますが、私たちの教育活動を支えている土台の部分は揺るぎません。逆に学習指導要領が変わったからといって、その都度、揺れ動くような学校であってはならないと思います。また、本校の理念と新課程の基本的な考え方の間に食い違いを感じることもありません」

時代や生徒の変化に対応しつつも、自校の位置をしっかりと確認しブレのない教育を行うことの大切さを小野高校の取り組みが示している。

新課程の検討に向けた視点

2013年度の新課程全面实施までに、校内ですべきことは何か。押さえるべきポイントを整理した。

現行課程総括と新課程の概要

「枠組み」の変更から「中身」の改善へ

高校現場での新課程における最大の関心事は、「大学入試科目の変更」だ（*）。ただ、大学入試の科目変更が未発表の現時点では、まず、現行課程での取り組みの成果と課題を総括しておきたい。

2003年度からスタートした現行課程への移行の際には、02年度から行われた完全学校週5日制と併せて、次の3点が課題に挙がっていた。

- ① 土曜休みや新教科・領域への対応
- ・ 授業時間の確保として、45分授業や課外授業の実施
- ・ 「総合的な学習の時間」の中での進路学習などの取り組み
- ② 中学校での学習内容の3割削減への対応

1 現行課程施行時の高校の対応（2003年1月調査）

図1-1 ベースとしている授業時間×コマ数の変化

	全体		公立		私立	
	02年度	03年度	02年度	03年度	02年度	03年度
45分×7コマ	10.4	13.4	10.1	14.1	11.0	12.2
50分×6コマ	59.3	54.6	55.2	48.4	65.9	64.5
55分×6コマ	4.9	6.5	7.6	10.1	0.6	0.6
60分×5コマ	0.7	0.4	1.1	0.7	0.0	0.0
65分×5コマ	11.6	10.2	17.7	15.5	1.7	1.7
70分×5コマ	0.7	0.7	0.0	0.0	1.7	1.7
その他	12.4	14.3	8.3	11.2	19.1	19.2

図1-2 平日の課外授業の動向（1学年）

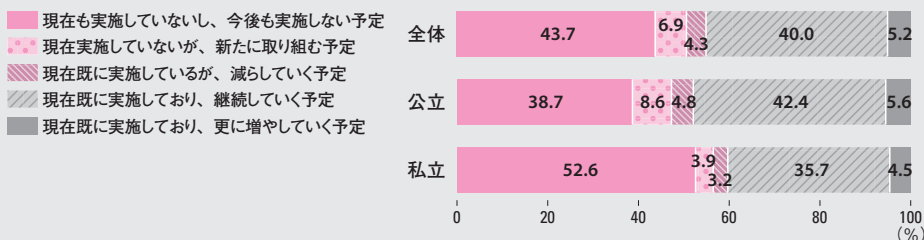


図1-3 中学校での学習内容の削減をどのようにカバーするか

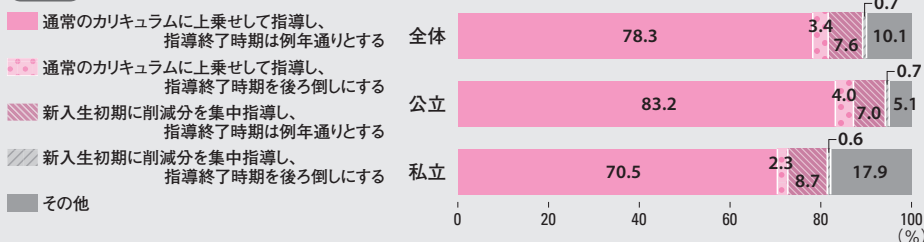
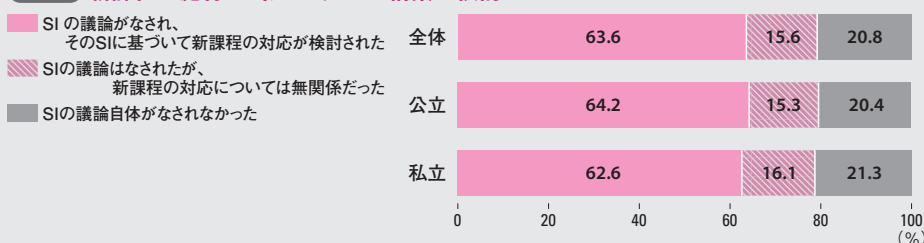


図1-4 新課程の施行に当たってのSI構築の検討



調査概要 ○調査主体：VIEW21編集部 ○調査時期：2003年1月中旬～1月末 ○調査対象校：全国の大学進学希望者が多い高校 1,101校 ○回答者：教務主任 ○調査方式：アンケート郵送方式 ○有効回答：453件（公立校277校、私立校176校）

*ベネッセコーポレーション「新課程に関するアンケート」（2009年7月）の調査結果による

- ・ 中学校の指導実態や高校入学段階での生徒の実態把握
- ・ 導入期指導や課外授業等の実施
- ③ 現行課程への移行を契機にした学校の目標づくり（SIの構築）
- 図1-1-4を見ると、現行課程施行時に各校で新たな取り組みを開始していたことが分かる。現行課程施行から7年が経過し、それぞれの取り組みの成果や課題が現れてきているはずだ。
- 新課程では、現行課程施行時と比較すると大きな変更はないが、既存の教科等での指導内容で、新たな視点が盛り込まれた（図2-1）。そこで、新課程を機に、次の4つのポイントを踏まえて現行課程を振り返り、現在の取り組みの「中身」を改善する契機としたい。
- ① 新課程の理解（狙い、学力観、学習指導観）
- ② 現行課程施行で新しく導入した取り組みの棚卸し
- ③ 効果の上がる取り組み、無駄の多い取り組みの整理
- ④ 中学校の実態の把握

2 2013年度全面実施 新課程での重要ポイント

図2-1

	高校 新課程のポイント	カリキュラム作成のポイント
国語	<p>■「国語総合（4単位）」のみ必修 現行課程では、「国語総合」と「国語表現Ⅰ」の選択必修であったが、「国語総合」のみを必修。更に、「国語表現」、「現代文A」、「現代文B」、「古典A」及び「古典B」の各科目については、原則として、「国語総合」を履修した後に履修させるものとする」とあり、履修順序も明確に示された。</p> <p>■言語活動例が具体的に示された 現行課程に比べ「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の内容が具体的に提示され、現場での指導の在り方に踏み込んだ内容になった。 例）（「国語総合」の「2.内容」の「書くこと」の項） ア 情景や心情の描写を取り入れて、詩歌をつくったり随筆などを書いたりすること。 イ 出典を明示して文章や図表などを引用し、説明や意見などを書くこと。 ウ 相手や目的に応じた語句を用い、手紙や通知などを書くこと。</p>	<p>■「国語総合」の単位増の検討。</p> <p>■「現代文A・B」、「古典A・B」の配置と取り扱いの検討（A科目は言語文化の理解が中心。B科目は読む能力育成が中心）。</p>
数学	<p>■「数学Ⅰ（3単位）」のみ必修 現行課程の「数学Ⅰ」と「数学基礎」の選択必修から、「数学Ⅰ」のみ必修（3単位）に変更。「数学A」は全分野必修から選択履修に再構成される。数Cがなくなり、数Ⅲは5単位で「複素数平面」が復活。</p> <p>■中学校との接続や系統性の更なる重視 「数学Ⅰ」では、新たに統計に関する内容を加え、中学校内容の「数と式」「図形」「関数」「資料の活用」の4領域との接続を重視し、「数と式」、「図形と計量」、「二次関数」、「データの分析」の4つで構成。</p> <p>■知識・技能の活用を重視 「数学Ⅰ」及び「数学A」の内容に「課題学習」を位置付けると共に、「数学活用」の科目を新設し、学習内容の「活用」が重視される。</p>	<p>■「数学Ⅰ」の単位増の検討。</p> <p>■「数学A」の選択分野をすべて扱うために、単位増の検討。</p> <p>■「数学Ⅰ」「数学A」の課題学習をどう取り扱うか。</p> <p>■「数学Ⅲ」の単位増の検討。</p>
英語	<p>■「コミュニケーション英語Ⅰ」のみ必修。 現行課程の「英語Ⅰ」または「オーラルⅠ」の選択必修が、「コミュニケーション英語Ⅰ」のみ必修に変更。「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能を総合的かつ有機的に関連させながら実践的なコミュニケーション能力を育成する点が明確化された。</p> <p>■言語活動充実のため言語材料の増加と活用の重視 高校で指導する標準的な単語数が1,300語から1,800語に増加（中学校、高校合わせて2,200語から3,000語に増加）。中学校・高校で学習する文法などの内容は、言語活動と関連付けて繰り返し指導して定着を図ることが明文化されている。更に、生徒自身の英語を活用する機会を増やせるよう、「授業は英語で行うことを基本」と示された。</p>	<p>■技能面での学力養成と知識定着のバランスに力点を置きつつ、大学入試を想定した3年間の科目編成・単位数の検討。</p> <p>■「英語で授業を行う」ことが必要な内容とそうでないものを精選して展開する。</p>
地歴・公民	<p>■科目の変更はなし 従来の方針を継承しつつ、「思考力」や「表現力」を重視。各科目で、課題を探究する学習が項目として設けられると共に、地図や年表をはじめとする各種資料の活用、論述・討論などの言語活動を重視。</p> <p>■世界史、日本史、地理相互の関連付けを重視。 必修科目である世界史では、地理や日本史にかかわる内容を充実。</p>	<p>■倫理・政経の4単位対応をどう工夫するか。</p> <p>■理科の影響を踏まえ、各科目の単位設定の判断が現行課程とは異なる可能性があることを考慮。</p>
理科	<p>■共通性と多様性を考慮した科目編成の柔軟化 物理、化学、生物、地学の中から3領域以上を履修するように見直された。日常生活や社会との関連を重視した「科学と人間生活」（2単位）を含む2科目、または、「基礎を付した科目」（2単位）のうちから3科目が必修。</p> <p>■小・中・高の学習内容を接続・系統化 小・中・高の理科を通じて、「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」の共通概念を柱として、発達段階を踏まえた内容の構造化が行われる。高校においてはそれぞれ、物理、化学、生物、地学の4分野の内容と関連。</p>	<p>■2科目必修で展開するか、3科目必修で展開するかの検討。</p> <p>■2単位科目の編成と、文理間で起こる差の検討。</p> <p>■4単位科目において5単位以上の確保をするかの検討。</p> <p>■歯止め規程が無くなることによる入試対応をどこまで行うか。</p>

中学校の変化

授業時数は年35時間増、
選択教科は原則廃止

中学校の新課程は、09年度から総則等に加えて、数学と理科が先行実施され、12年度に全面实施となる。つまり、高校の12年度入学生は、数学と理科については中学校3年間を新課程で学んだ生徒となる。数学と理科については、12年度から新課程でのカリキュラム対応が必要だ。

中学校の新課程で押さえておきたい事項は、学習内容の増加とそれに伴う授業時数の増加だ(図3-1、2)。授業時数は、3学年共に、週当たり1時間増の29時間となり、年間で35時間増となる。

また、選択教科は原則として廃止となる。調査でも「選択教科を実施しない」と回答した中学校は9割に上る(図3-3)。中学校教育の共通性が高まるといえそうだが、中学校現場は「生徒の興味関心に応じた学習機会の減少」を懸念している(図3-4)。これらが生徒にどのような影響を及ぼすのかを予測しておきたい。

3 中学校の新課程への対応

図3-1 中学校における授業時数の増加

上段数字は時間数、上段()内は週当たりの時間数、下段数字は現行課程からの増減時間数

	国語	社会	数学	理科	外国語	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	道徳	特別活動	選択教科	総合的な学習の時間	合計
1年	140(4)	105(3)	140(4)	105(3)	140(4)	45(1.3)	45(1.3)	105(3)	70(2)	35(1)	35(1)	—	50(1.4)	1015(29)
	0	0	+35	0	+35	0	0	+15	0	0	0	0~-30	-20~-50	+35
2年	140(4)	105(3)	105(3)	140(4)	140(4)	35(1)	35(1)	105(3)	70(2)	35(1)	35(1)	—	70(2)	1015(29)
	+35	0	0	+35	+35	0	0	+15	0	0	0	-50~-85	0~-35	+35
3年	105(3)	140(4)	140(4)	140(4)	140(4)	35(1)	35(1)	105(3)	35(1)	35(1)	35(1)	—	70(2)	1015(29)
	0	+55	+35	+60	+35	0	0	+15	0	0	0	-105~-165	0~-60	+35
計	385	350	385	385	420	115	115	315	175	105	105	—	190	3045
	+35	+55	+70	+95	+105	0	0	+45	0	0	0	-155~-280	-20~-145	+105

図3-2 中学校の新課程における授業時数の確保の仕方

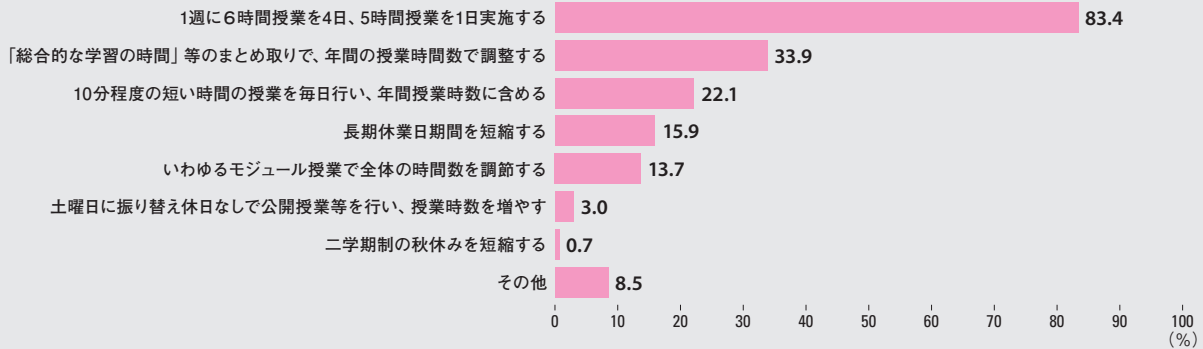


図3-4 「選択教科」を開設しなかった場合に起こると予想される問題

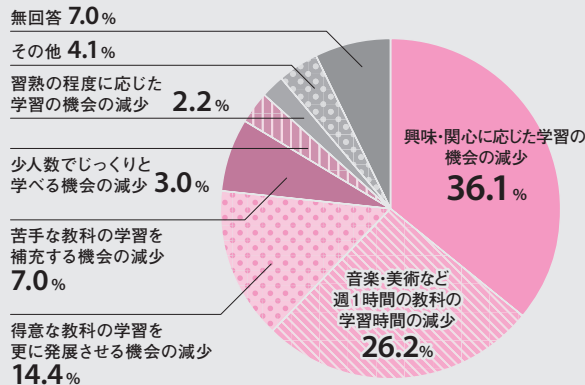


図3-3 新課程における「選択教科」の開設の有無

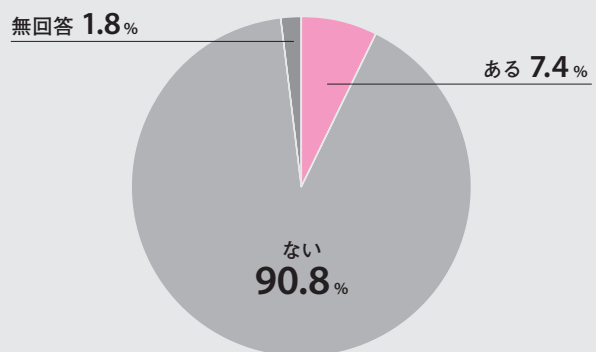


図3-2~4 出典/全日本中学校長会「新しい時代に求められる学校づくりの調査研究」(2009年3月)

まずは現行課程の総括を



国立教育政策研究所
初等中等教育研究部長
工藤文三
Kudo Bunzo

教育課程編成の主体は学校

新学習指導要領が告示されて1年が経過しました。全面実施までにまだ時間があることから、学校現場の関心の高まりはいま一つのようにです。新学習指導要領を受けて教育課程の検討を進めている学校も、単位数や選択科目など教育課程のやや技術的な面に気を取られ、どのような学校を目指すのか、各教科等の教育を通してどのような力を身に付けさせるのかという本質的な議論にまで及んでいない状況にあるのではないのでしょうか。

忘れてはならないのは、教育課程

編成の主体はあくまで学校であり、学習指導要領はその基準に過ぎないということ です。「学習指導要領が改訂されたから教育課程を変えなければならぬ」という受け身の発想ではなく、生徒の学力や特質・実態、地域の特性など、自校を取り巻く課題を整理した上で、学校の課題解決の方向と新学習指導要領との適合性を図ることが大切です。

現行課程が告示されてから10年がたちました。まずは、この10年間を総括することが必要と考えます。これまでの取り組みの成果と課題を明らかにすることによって、新課程に向けた議論はより実りのあるものになると思われます。

改訂の背景と趣旨を理解する

今回の改訂では、総則で「基礎的・基本的な知識・技能」「思考力、判

断力、表現力」「主体的に学習に取り組む態度」など目指すべき学力観が明示されました。それに伴い、各教科・科目等で「知識・技能の活用」や「言語活動」などが重視されています。

しかし、「活用」や「言語活動」はそれ自体が目的ではなく、それらを通してどのような力を身に付けさせたいのかという点を明確にしないと、改訂の趣旨は生かされません。学習指導要領及びその解説をしっかりと読み込み、何のために「活用」や「言語活動」を提示しているのかを理解しておくことが大切です。

教育課程の移行期の課題は、学習指導要領の狙いや求められる学力観、学習指導観をしっかりと理解することです。今回の改訂でいえば、「活用」や「言語活動」充実の背景には、PISA調査等の結果から明らかにした日本の高校生の課題がありま す。高校生の学力の課題を解決するための一つの方向性として改訂が行われたことを十分に理解した上で、教育課程の編成や授業の工夫をする

ことが大切と考えます。

中学校との関連に目配りを

「義務教育段階での学習内容の確実な定着」を図ることがうたわれたのも、今回の改訂の大きなポイントです。このことは高等学校教育の質の向上に資すると共に、中学校と高等学校の円滑な接続を促すことにもつながります。総則には学習機会を設けることや、単位数の増加、学校設定科目の活用が示されています。どの方法を用いるかは、学校の事情や生徒の実態に依存しますが、大切なことは入学してくる生徒の学習状況を適切に診断することです。

また、「学び直し」を効率的に行う上で忘れてならないのは、中学校の教育内容をしっかりと把握しておくことです。中学校の学習指導要領では、数学・理科等の指導内容や授業時数の増加、選択教科の縮減など、大きな変化がいくつかありました。中学校と高等学校の指導内容の関連や系統性について十分検討し、指導計画に反映させることが大切です。

一定水準の知識があっても その活用は不十分な大学生

Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査報告書」より

図 大学での学習成果

□ かなり身についた □ ある程度身についた ▨ 全く身につけていない

()内は、「かなり身についた」「ある程度身についた」の合計



出典○「大学生の学習・生活実態調査報告書」/調査時期○2008年10月/調査方法○インターネット調査/調査対象○18～24歳の大学1～4年生(ただし、留学生、社会人経験者を除く)/有効回答数○4,070人

知識や情報のインプットに高い成果

図は、大学での学習成果として期待される28項目について、大学生に大学生活を通じて身に付いたかどうか尋ね、肯定率(「かなり身についた」と「ある程度身についた」の合計)が高い順に並べた結果だ。上位には、コンピュータリテラシーや専門分野の知識に関する項目が分布し、知識獲得はかなり出来ているようだ。ところが、中下位には、課題解決や情報活用、思考の論理性・多様性に関する項目が多くあり、一定水準の知識はあっても、それを活用する力は十分に身に付いていない様子がうかがえる。

知識のアウトプットを高校でも経験させたい

この結果を見た高校現場からは、「高校での学習の延長上ともいえる知識の獲得が上位にあり、本来、大学で身に付けてほ

しい力が上位にない」という指摘があった。更に、「高校での授業は知識の注入に終わり、生徒が学んだことをアウトプットする機会は定期考査などに限られる。しかし、高校は大学での学びの土台をつくる段階と考え、知識や情報の活用を意識させる活動を授業に取り入れた方がよいのではないかと話す。

「小学校から大学までの教育の流れを意識すべき」という声もあった。「中学校では『総合的な学習の時間』や教科学習で自分の意見を伝えたり、調べ学習をしたりする機会が多いと聞く。高校でも、例えば英語ならシャドーイングや音読など、知識を活用する機会をつくり、大学教育へとつなげたい」というものだ。

アウトプットする機会を設け、学習の成果を認めることは、自己肯定感や自信にも結び付く。生徒の学びの意欲を高め、積極的に授業に臨むようにするためにも、知識の活用を意識した活動を取り入れたい。

調査結果の詳細は下記ウェブサイトでご覧いただけます
<http://view21.jp/k9631>

Benesse教育研究開発センターのウェブサイトからも
検索できます → <http://benesse.jp/berd/>

ベネッセ 研究 で 検索

山形県立 **鶴岡南高校**

生徒の主体性の育成

「さまざまな体験を通じて『人間の器』を大きくすることが、生徒の自ら学びに向かう力を育んでいます」

▶▶▶ P.18



指導**変**革の軌跡

そのとき教師は、そして生徒は
どう変わったか



愛知県・私立 **名城大学附属高校**

導入期指導

「叱るべき時はきちんと叱り、励ます時はとことん励ます。緩急を付けた指導が生徒をその気にさせるのです」

▶▶▶ P.22

鳥取県立 **鳥取中央育英高校**

小中高連携

「学校種を越えた指導法の共有により、地域の子どもは地域で育てようという意識が根付きつつあります」

▶▶▶ P.26





◎「自主」「叡智」「剛健」を校是として、自主的・自律的に行動できる人間の育成を目指す。部活動も活発で、全生徒の9割が加入。2008年度は、アーチェリーが団体がインターハイ出場、男子バドミントンと女子ソフトテニスが高校総体ベスト4、陸上と水泳が東北大会出場を果たした。

設立	1877(明治10)年
形態	全日制・通信制／普通科・理数科／共学
生徒数	1学年約200人
09年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、東北大、山形大、筑波大、東京大、新潟大、京都市大、大阪大、山形県立保健医療大などに128人が合格。私立大は、岩手医科大、青山学院大、慶應義塾大、中央大、法政大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ115人が合格。
住所	〒997-0037 山形県鶴岡市若葉町26-31
電話	0235-22-0061
Web Site	http://www.tsuruokaminami-h.ed.jp/

山形県立 鶴岡南高校

生徒の主体性の育成

生徒が企画する LHRで自ら挑戦する 生徒を育てる

変革のステップ

背景

◎主体的に学びに向かえない生徒が増え、受験直前期に「最後の伸び」を発揮出来ない生徒が目立つようになる

実践

◎生徒の自主企画によるLHRと朝学習を導入し、主体性を育むと同時に、数学を中心にトップ層の形成を図る

成果

◎取り組みの先を見通して動ける生徒が増え、行事が活性化。クラスに一体感が生まれ、学習にも前向きに取り組むようになる

生徒の自主企画LHRで 「人間の器」を大きくする

山形県立鶴岡南高校は、2008年度の1学年(現2学年)から、生徒の主体性を重視したLHRに取り組み始めた。その背景には、受け身な生徒の気質に対する危機感があった。

同校は例年100人以上の国公立大合格者を出す、県を代表する進学校の一つだ。しかし、近年の生徒には、教師が指示したことには素直に取り組むが、それ以上のことをしようとするという傾向があった。生徒は家庭や塾などでの経験で「与えられること」が当然になっており、高校に入っても教師がお膳立てをして課題や補習を与え続けなければならぬ状況にあった。それが、生徒の受け身な姿勢を更に助長させるといふ負の連鎖に陥っていた。同校では、この悪い循環を断ち切り、主体的に学びに向かう意欲を育てることが急務とされた。2学年主任の難波理先生は、次のように説明する。

「受験直前で成績が伸びる生徒は、自分で考えて学習に取り組める生徒です。生徒によって受験科目も苦手科目も異なりますから、学校から渡された課題だけ勉強していたのでは、伸びに限界があります。3年生までに自ら学習する姿勢を育むには、1年生の早い時期からの仕掛けが必要だと考えました」

取り組みに当たり、教師が意識したのは「成

功体験を積ませること」「見通しを持って取り組みに臨ませること」だ。

まず始めたのは、生徒が企画・運営するLH



山形県立鶴岡南高校
難波 理 Namba Osamu

教職歴24年。同校に赴任して14年目。2学年主任。「生徒の夢と、共に歩み続けたい」



山形県立鶴岡南高校
松浦政弘 Matsuura Masahiro

教職歴15年。同校に赴任して3年目。総務課。2学年担任。「モットーは思考停止しないこと。時間がかかっても必ず解決策は見つかる」



山形県立鶴岡南高校
佐藤雄樹 Sato Yuki

教職歴11年。同校に赴任して7年目。生徒指導課。2学年担任。「今、生徒に必要なことは何か」を見極め指導に取り組んでいきたい」



山形県立鶴岡南高校
五十嵐満 Igarashi Mitsuuru

教職歴11年。同校に赴任して7年目。進路指導課。2学年担任。「生徒一人ひとりが自信を持つような指導を心掛けている」



山形県立鶴岡南高校
佐藤恵美 Sato Emi

教職歴8年。同校に赴任して4年目。生徒指導課。2学年担任。「常に心に目標を。高い壁があればこそ、ジャンプのしがいもある」



山形県立鶴岡南高校
萩原晴菜 Hagihara Haruna

教職歴・赴任歴共に3年。教務課。2学年担任。「為せば成る、為さねば成らぬ何事も。成らぬは人の為さぬなりけり」

Rだ。大学研究などの進路行事の軸は守りながら、学級が自由に使っていたLHRを生徒の主体性を育む場とした。学級を6〜7人ずつの班に分け、企画から当日の運営までを一つの班が交代で取り仕切る。実施2週間前までに担任に目的、準備などをまとめた企画書を提出するが、基本的に内容は自由。これまでに、全体行事に向けての会議や鍋パーティーなどが行われた。「受験期のプレッシャーをはねのけながら、

自ら学びに向かう力を身に付けるには、基礎学力だけでなく、さまざまな体験を通して成長すること、いわば『人間の器』を大きくすることが必要です。生徒自らが見通しを持つて物事に取り組みながら成功体験を積み重ねることで、器を大きくしていくことが出来るのではないかと考えたのです」(難波先生)

企画立案の経験が生徒の成長とクラスの団結を促す

生徒が運営するLHRには、生徒同士のコミュニケーションが促進され、相互理解が進むという効果もある。五十嵐満先生は生徒の様子を次のように話す。

「私の学級では、1年生5月の最初の自主企画で流しソーメンを行いました。入学したばかりとあって、生徒間のコミュニケーションにはぎこちなさもありましたが、準備を進

めるうちに、例年がない早さでうち解け合うことが出来ました。入学当初から自分たちで考えて取り組む姿勢が求められたので、学年全体に活気が生まれ、学級替え以降も、行事に対して積極的に臨む生徒がこれまでよりも多いと感じます」

失敗した企画もあるが、それも学級の団結や生徒個々の成長には欠かせない経験になっていると、萩原晴菜先生は強調する。

「生徒はいかにクラスメートを楽しませるかという観点で企画を練ります。しかし、クラス全体を動かすのは難しいものです。前日まで企画がまとまらない、当日、企画書通りに進まない、ということも珍しくありません。ただ、イベントが盛り上がりながらかつとしても、運営した班を責める生徒はいません。生徒一人ひとりが企画に携わり、運営の大変さを身にしみて分かっているからです。互いの努力を認め合う雰囲気生まれています」

松浦政弘先生も、成功しても失敗しても、挑戦すること自体が生徒を人間的に大きくさせると感じている。

「集団での活動では、よほど強いリーダーシップのある生徒でなければ、自ら先頭に立って周りを引っ張ろうとはしません。しかし、10代は失敗しても周りが支えてくれる時期です。そうした時期に試行錯誤を繰り返して、周囲のサポートの大切さを実感するのは貴重な

体験になります。また、自分のアイデアや能力を試す場を生徒に用意することによって、自信が持てるようになったり、今まで見えていなかった自分を発見したりする機会にもなっています」

「クラスのために何が出来るか」を生徒自身が考え行動する

運営に際して、担任が意見を述べるのは基本的に企画段階だけだ。費用や安全面などについては助言するが、内容面には極力踏み込まない。ただ、どの程度、生徒に任せるといふ見極めは、学級全体の雰囲気を見ながら適宜判断していると、佐藤雄樹先生は話す。

「イベントでは、ともすれば元気の良い生徒ばかりが目立ってしまいます。取り組みを学級全体のものにするためには、内気な子が疎外されたり、同性だけで固まったりするところがないように目を配る必要があります」

LHRの活用は、現行の学習指導要領を前向きにとらえた取り組みでもある。現行課程の下で学んできた生徒は、授業時数や学習内容の減少による学力低下の観点で見られがちだ。しかし、「総合的な学習の時間」の活動などを通して、旧課程の生徒以上に伸びている力もあるはず。その力を伸ばすことで、「人間の器」を大きく出来ないかと、難波先生は考えた。

「以前、中学校の発表会を見学した時に、中学生が自らビデオカメラで撮影したり、照明を使ったりして積極的に動いている姿を見ました。今の中学生はこういうことが出来るのに、高校ではその力を伸ばすような取り組みをしていないことに気付きました。本校では、限られた時間できちんと成果を出すために、とかく何でも教師が用意してしまいがちでした。しかしそれでは、生徒の中にはほとんど何も残らないのではないかと考えました」

1年生から取り組みを進めてきた結果、2年生になった今では、事前の準備やスケジュール管理など、見通しを持って活動に取り組む生徒が増えたという。また、佐藤雄樹先生は次のような生徒の変化を挙げる。

「教室には進路関係の資料を置いてある棚があります。普段は資料を出しっ放しにしておくなど、片付いていないことが多いのですが、ある時、私が注意したわけでもないのに、きちんと整理されていることがありました。それを見た時はうれしかったですね。LHRの企画立案というクラスメートのために汗を流す経験を通して、『皆のために出来ることはないか』ということに、おのずと目を向けられるようになったのではないのでしょうか」

他者のために働く経験で、クラスの一員としての自覚が芽生え、自律的な行動につながっているようだ。

図1 朝学習スケジュール

月：自主学習
週末に予習が間に合わなかった生徒のために、朝学習係の要望により設定
火：プリント学習
生徒が選んだ課題によるプリント学習。内容は数学パズルや言葉遊びなど発想力を問うものが多い
水：自主学習
7時間目に行う小テストの予習のための時間。朝学習係の要望により設定
木：文を読んで要約
生徒が選んだ文章（新聞記事や書籍の一節などから抜粋）を読んで要約を書いたり、感想を述べたりする
金：読書
生徒の読解力や考える力を高めるために、木曜の課題と共に教師の要望により設定

生徒自身の手で朝学習のスケジュールと内容を立案

2年生では、朝の時間帯にも生徒の自主企画を取り入れた。入学当初は朝読書をしてきたが、教師が会議で常駐できないこともあり遅刻が増加、半年ほどで形骸化した。そこで、学級に2人いたもののそれまでほとんど働く場面のなかった朝学習係を「学年のブレイン」と位置付け、教師と朝学習係が話し合いながら朝学習の内容やスケジュールを決めることにした。

1週間のスケジュールは、月曜と水曜は自主学習、火曜は生徒が選んだ課題を解くプリント学習、木曜は課題文を読んだ要約、金曜は朝読書である（図1）。スケジュールと課題は学年共通だ。実施前には、朝学習係の代表が学年

集会で企画趣旨と内容、朝学習に対する意気込みを発表し、一同の奮起を促した。

月曜は週末に予習が追いつかなかった生徒のため、水曜はその日の7時間目にある小テストのための自習である。これらは生徒の意見を吸収して、朝学習係が要望を出し設定された。火曜は文理を問わず総合力が付く課題を生徒自身を選ぶ。生徒が興味を持って考えたくなるような課題が多い。木曜と金曜の内容は、考える力や読解力育成のための取り組みを入れたという教師側の意向に基づいて設定された。

朝学習係は、自分たちが考えた課題に学年のすべての生徒が取り組むとあって、大きな責任感と達成感を感じている。仲間が企画・運営を行っていることで、遅刻をする生徒は減り、生徒自身が選んだ課題ということで、興味を持って取り組む雰囲気醸成されている。

数学の補助教材で 難関大への意欲を高める

同学年では、数学を核とした難関大受験への意識付けも、早期から積極的に行ってきた。ユニークな取り組みは「採点者にラブレターを書こう」だ。東京大や医学部などの過去のプリントを配布し、解答を募る。難関大の入試問題も低学年での学習内容で解けることを伝え、自信を付けさせることが目的だ。

数学に自信のある生徒、問題に興味のある生徒がプリントに解答を書き、職員室前のポストに投函する。友人と一緒に考える者や、ペンネームで投稿する者などさまざま。他学年にも関心を持ってもらいたいという思いから、同じ課題を拡大コピーして職員室前に張り出しておく。続いて、問題発表の翌週に解答プリント(図2)を配布し、同時に次の課題も提示する。解答プリントでは、生徒から寄せられた良い解答やユニークな解答を紹介。不正解でも考え方が良い解答は積極的に紹介し、チャレンジした生徒が達成感を感じられるように配慮している。

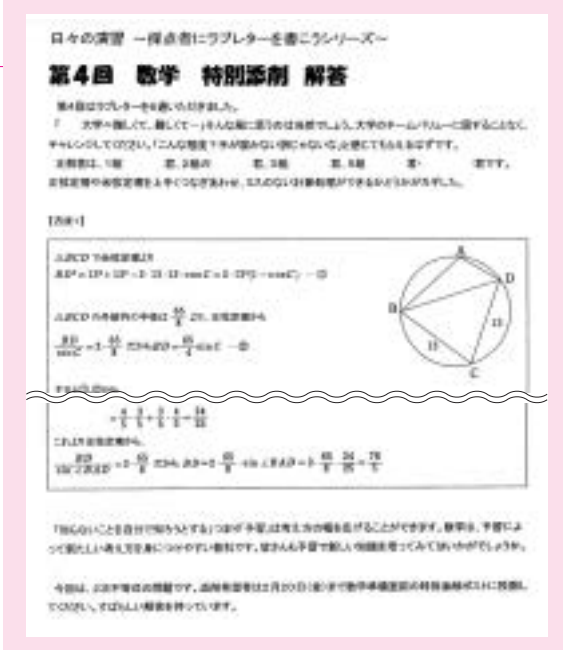
「本校では数学Ⅲ・Cを終えるのが8月です。9月には演習が始まりますが、その頃は物理や化学の対策も始まり、数学ばかりに手が掛けられない状態になります。そうなる前に、先取り学習のようなことが出来ないかと考えました。『ラブレター』と名付けたのは、生徒を楽しませながらその気にさせると共に、丁寧に問題に向かわせたいという思いがあったからです」(難波先生)

1年次には同様の趣旨で「数学愛好会」を、2年次ではそれを発展させた「S1学習会(*)」を立ち上げ、補習を行っている。生徒同士で数学を教え合う光景が見られるようにな

ったため、現在では学年のけん引役となるトップ集団を形成する取り組みへと昇華させている。そして、いよいよ同学年も3年生となる。生徒同様、教師にとっても正念場だ。佐藤恵美先生は、次のように決意を述べる。

「3年次を迎えるに当たり、自分には何が必要かという現状認識と、そのために何をすべきか、という見通しを持つことが重要になってきます。2年間の取り組みを土台にして、3年次ではより自分を律して受験勉強に挑んでいける力を付けさせたい。生徒が真の自立した学習者になるために、担任としてのどのような支援が必要か、これからも勉強を積み重ねていきたいと思えます」

図2 「採点者にラブレターを書こう」解答プリント



今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2008年9月号特集「自立する高校生をどう育てるのか—実践編」など
▶▶▶ <http://view21.jp/k9641>



◎1926年、名古屋高等理工科講習所として開設。48年、名古屋文理高校として開校し、51年に現校名に改称。理系教育を重視し、2004年度にサイエンス・パートナーシップ・プログラムに、06年度にはスーパーサイエンスハイスクールに選ばれた。

設立	1926(大正15)年
形態	全日制／普通科・総合学科／共学
生徒数	1学年約640人(内特別進学クラス約120人)
09年度入試合格実績(特進クラスのみ、現浪計)	国公立大は、東京大、東京工業大、静岡大、名古屋大、名古屋工業大、豊橋技術科学大、愛知県立大、名古屋市立大などに計47人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、明治大、早稲田大、南山大、名城大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ281人が合格。
住所	〒453-0031 愛知県名古屋市中村区新富町1-3-16
電話	052-481-7436
Web Site	http://www.meijo-h.ed.jp/

愛知県・私立
名城大学附属高校

導入期指導

入学時からの徹底支援で 生徒の不安をぬぐい 学習への意欲を高める

変革のステップ

背景

◎量を与える指導により進学実績は向上したが、実績が上がるにつれ学校に顔が向かない生徒が増加

STEP 1

実践

◎補習や課題を削減する一方、スタディサポートや模試を活用して、教師に対する生徒の信頼感を高め、学習習慣の確立を図る

STEP 2

成果

◎欠席や遅刻が減り、教師と生徒の距離が近くなる。学習習慣も徐々に定着し始めている

STEP 3

**第1志望に届かなかった
挫折感が生徒の心を閉ざす**

2007年の春、名城大学附属高校の山村信一先生は、かつてない違和感を覚えていた。物理科担当の山村先生は、2年生から生徒にかかわることが多い。その年も2年生の担任となり、特別進学クラス(以下、特進クラス)の指導に当たった。しかし、例年よりも生徒の反応が鈍く感じたのだ。「2年生になって初めて生徒の前に現れたのだから、すんなり受け入れられないのは当然だ。良い授業さえしていれば、生徒の顔は自ずと教師に向き、遅れも取り戻せるはず」。そう信じてきた。

ところが、その年の生徒は違っていた。いくらか授業を丁寧にしても、顔が教師の方に向かない。なぜそれをすべきかを丁寧に説明しても、理解を示さない生徒が少なからずいた。

空回りしたまま卒業していったが、その間、違和感はくすぶり続けた。原因はどこにあるのか。山村先生が出した結論は、1年生の頃から教師とのコミュニケーションが必ずしも十分ではなかったこと、そして、愛知県内における同校の位置付けに要因があるというものだった。

名城大学附属高校が特進クラスを設置したのは23年前。男女共学とした1999年度から実績が向上し始め、09年度の大学入試で初めて現役で東京大合格者が輩出。高校入試では特進ク

ラスだけで2000人以上の志願者を集めるまでになった。

しかし、愛知県は伝統的に公立高校に対する生徒や保護者の信頼が厚い。同校の進学実績が向上しても、公立高校の「有力併願校」という位置付けは変わらなかった。生徒の大半は、第1志望への合格を果たせなかった挫折感を抱いて進学する「不本意入学者」だった。

そこへ、特進クラス伝統の「量を与える指導」が追い打ちをかける。7時限後の放課後補習、土曜日の隔週補習や長期休暇中の集中補習、そ



梁川津吉

名城大学附属高校
Yanagawa Tsuyoshi
教職歴・赴任歴共に27年。進路指導部長。「大切なのは生徒を信じることで、そして生徒に信じてもらいたい」



荻野茂美

名城大学附属高校
Ogino Shigemi
教職歴・赴任歴共に26年。特進2学年主任。「大学受験は結果がすべて。高校時代に結果がすべてであるものを体験できる意義は大きい」



原口敏幸

名城大学附属高校
Haraguchi Toshiyuki
教職歴22年。同校に赴任して20年目。特進3学年主任。「特進クラスだからこそ、勉強以外のことも懸命に取り組ませたい」



山村信一

名城大学附属高校
Yamamura Shinichi
教職歴・赴任歴共に15年。特進1学年主任。「目標なき教育活動は成果が伴わない。自分が納得できるまであきらめず行動したい」

してほぼ毎日ある大量の課題。理想と現実の差に折り合いをつけられない生徒が増えていった。進路指導部長の梁川津吉先生は次のように話す。

「進学実績が上がるとつれ、入学者の学力も高くなっていきました。その中で、それまでと同じようにひたすら努力を強いいる指導を続けた結果、高校生活を窮屈に感じる生徒が増えたのではないのでしょうか。本校が更に飛躍するためには、今まで以上に生徒と教師の距離を近づけ、厚い信頼関係を築くことが必要だと考えました」

09年4月、山村先生は1学年主任となり、若手教師を中心とする学年団が発足。学習量だけに頼らない「生徒と教師がつながる指導」を目指した改革が始まった。

先輩からのビデオレターで生徒の心を学校へと向ける

学年団が指導上重視したのは、「学校に顔を向けさせる」「その上で学習習慣を身に付けさせる」ことだった。

「いくら熱心に指導しても、生徒の意識が学校に向いていなければ、生徒は前向きに頑張ろうという気持ちにはなれません。また、学習習慣が身に付いていない状態で、次から次へと課題を与えても、成果が上がらないどころか、あきらめてしまう生徒も出てくるで

しょう。1年生ではまず生徒の居場所をつくり、学校に顔を向けさせた上で、生徒の変化を見ながら徐々に学習習慣を身に付けさせることが重要だと考えました」(山村先生)

山村先生は、3年間を見通した指導計画を立てた。09年度1学年の特進クラス(3クラス)の担任は平均年齢32歳と若く、指導経験が浅いため、先の見通しを立てて指導に当たることが必要があったからだ。1学年の計画のポイントは三つ。①先輩からのビデオレター、②補習量の絞り込み、③模試・スタディサポーターの活用だ。

まず取り組んだのは「先輩からのビデオレター」だ。教師に身構える生徒の心を解きほぐすため、10人の卒業生が先輩へのメッセージを話す姿を撮影し、入学直後のオリエンテーションで見せるというもの。時間は1人2〜3分で、内容は「なぜ名城大学附属高校を受けたのか」「入学までの経緯」「充実した学校生活を送る秘訣」「先輩へのメッセージ」。事前に原稿は用意せず、要点をまとめたメモを見ながら、ビデオカメラの向こう側にいる先輩に語り掛ける。語り手には第1志望の公立高校に不合格だった卒業生、大学受験で志望を実現できなかった卒業生も選り、挫折体験を含めて赤裸々に語ってもらった。

「どのようなことから未来が開けるのか分からぬ。前向きに高校生活を送っていれば、きっかけは必ずつかめるということを伝えた

かったのです。志望校に合格できなかったとしても、そのための努力を惜しまず、納得して卒業していった先輩の言葉は必ず心に響きます。事後アンケートでは、ほとんどの生徒が『同じ気持ちの先輩がいたことが良かった』『頑張れそうな気持ちがしてきた』という前向きな感想を寄せてくれました」（山村先生）

補習を削減する理由を保護者に説明し、理解を得る

続いて、補習や課題を削減した。学力低下を不安視する声があったが、山村先生は「生徒の顔を学校に向けさせることを優先すべき」と訴え、放課後補習はすべて廃止にする代わりに、授業に全力を傾け、国数英の家庭学習を徹底させた。土曜補習は模試の事前事後指導に絞った。小テストは全校共通の漢字と英単語のみ。また基準点も設けず、点数が悪くても追試はしない。補習削減に対する保護者の理解を得る努力も、怠らなかった。かつて、1年生の補習を減らした時に保護者からの批判が相次ぎ、翌年から補習を復活させたことがあった。2学年主任の荻野茂美先生は、保護者への説明の重要性を次のように話す。

「本校には、中学3年生から塾に通い、短期間に学力を引き上げてもらって合格したという生徒が多くいます。生徒も保護者も与え

られることに慣れ、学校や塾に依存する傾向にあります。特に保護者は私立の特進クラスに入学させた以上、公立高校よりも熱心に面倒を見てくれることを期待していますから、補習を減らす

ことは大きな決断だったと思います」補習削減に対して、保護者からの問い合わせが数件寄せられた。教師は丁寧な指導方針を説明し、学級懇談会や三者面談などで「補習を減らす狙い」を訴え続けた。中には「そこまで考えていただいていたのですね」と驚き、お礼を述べた保護者もいたという。

成績が下がるタイミングを見計らい、意図的に「叱る」

学習習慣の確立に向けた布石も打った。特に重視したのは、1年生の9月中旬という時期だ。夏休み後の気持ちの切り替えが難しい上に行事

図1 「振り返りシート」



模試ごとに自分の成績を振り返らせ、成績の推移を把握して、次の模試の目標を書く。保護者は子どもが書いたシートを読んで、コメントを寄せる。担任は具体的なアドバイスを書き込んだ上で、生徒に返す
*学校の資料を基に編集部で作成

が続き、中だるみをしやすい。学習時間の少なさや計画性のない学習に気付かせ、自分の生活を振り返らせる必要があると考えたからだ。

山村先生は第2回スタデイサポートに着目。9月の文化祭後の実施のため、生徒はほとんど準備をせずに受ける。9月の成績は4月に比べて下がるだろうから、それを生徒に示し、奮起を促そうとした。予想通り、9月のスタデイサポートでは、やや中だるみが感じられ、山村先生は生徒を叱咤激励。その後も、学習時間や成績の相関を数値で示し、自学の大切さを訴えた。この手法は他学年からも注目を集めた。3学年主任の原口敏幸先生は次のように話す。

「09年度の1学年が従来の特進クラスと決

定的に異なるのは、スタディサポートを軸とした学習計画を立てているところです。生徒の学習・生活状況の変化をあらかじめ読み取り、2学期以降の指導に生かすというのは、他学年でも活用できます。変化を織り込んだ指導計画を立てることで、若手の先生も安心して指導に当たれるのではないのでしょうか。自学自習の重要性に気付いた生徒が行動に移れるよう、学年独自の「振り返りシート」を用意(図1)。目標点や成績の推移、次回のテストに向けた目標や意気込みを記入させて具体的な行動へ誘う。担任は必ずシートに目を通し、生徒が行動しやすいよう具体的に、やる気の出るようなアドバイスをする。叱るべき時は叱り、励ます時には元気を与える。緩急を付けた指導で生徒をその気にさせることも意識している。

2年生では補習を強化 3年生で手を離し、主体性を育てる

改革から1年。生徒の意識は徐々に変化している。欠席や遅刻はほとんどなくなり、入学時に比べ普段の会話でも、教師のちょっとした冗談に笑顔で返す生徒が増えるなど、生徒と教師の距離は確実に縮まっている。何よりも、教師が生徒を褒める場面が多くなった。9月に喝を入れたかもあり、学習習慣は定着してきた。これらの成果を踏まえ、1年生3学期からは

隔週で土曜補習を再開するなど、徐々に従来の「厳しい指導」に転換しつつある。2年生は「理科・社会の貯金をつくる学年」と位置付け、密度の濃い補習を積極的に行う計画だ。夏から秋にかけて大学・学部研究を行い、入試への気持ちを高めた上で、3年生では再び補習を減らし、生徒の主体性に任せる指導に切り替えていく。

「3年生で手を離す」と学年で目線合わせをしているからこそ、今どのような指導が必要なのかを考えられるのです。いつごろ手を離せばよいのか、進研模試やスタディサポートのデータ、

生徒の様子を見ながら、教科担当と話し合っって判断していきたいです

(山村先生)

今後は同学年の取り組みを他学年に波及させていく。

「今は学年間の縦のつながりが少なく、他学年の取り組みを生かす切れていませ

ん。特進クラスが更に飛躍を遂げるには、学年色は残しつつ、良い取り組みを継承する体制を整えることが大切だと考えています。学年間でノウハウを共有できる体制を整えていくことが、今後の課題です」(梁川先生)

議論のたたき台は、同学年が作成中の指導計画だ(図2)。3年間を見通した大まかな計画を立て、詳細な実行案は取り組みと並行して精緻化を図っている。3年間を通した形が整うのは2年後、現1年生が卒業する時だ。取り組みの継承は、同学年の躍進にかかっている。

図2 3年間の指導計画(抜粋)

1年生の進路目標 進路行事を通して将来の目標を確立し、その上で自分の適性は文系か理系か、はっきりさせよう。						
1学期の学習目標 高校の学習方法を確立し、自分の学習方法をしっかり見直そう。						
月	日(曜日)	学校行事	定期テスト・模試	進路行事	学習への取り組み(アドバイス)	月目標
4月	3日(金)	入学式			いよいよ高校生活の始まりだ!	
	6日(月)~7日(火)	新入生オリエンテーション		先輩からのメッセージ	非常に厳しい大学受験を経験した先輩からの温かいメッセージをビデオレターで用意しています。君たち後輩を想う先輩の経験談を聞いて、自分の目標や夢を具体的にイメージしてみよう。	
				第1回スタディサポート	スタディサポートで現在の自分の学力を再確認しよう。さらに、スタディナビゲーター1年生第1回にまどめをして、ステップアップの目標を立ててみよう。	今までの学習方法を改善し、高校での学習方法を確認しよう。
	8日(水)	始業式対面式			明日から高校での授業が始まります。名城の先生はとても優しく、丁寧な授業であると先輩から評価されています。良い授業をしっかりと聞いて基礎学力をしっかりとつけていこう。	
	10日(金)			第1回進路希望調査	この進路希望調査を機会に、高校卒業後の夢を考えてみよう。同時に入学後の学習姿勢を振り返るチャンスです。必ず家族の人と語り合いながら記入しよう。	
	11日(土)	校外活動(遠足)			進路授業1(総合的な学習の時間)	【出会いの試み】緊張しているみんなへ、先生方はもちろん仲間となったみんなとも気軽に話せる「マジック」を用意しています。翌日の校外活動を通して良い仲間づくりを試みよう。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2008年9月号指導変革の軌跡「山形県立新庄北高校」など
▶▶▶ <http://view21.jp/k9642>



◎2003年度、鳥取県立由良育英高校（1906年設立）と鳥取県立赤碕高校が統合再編して開校。「克己」を校訓とし文武両道を目指す。全国大会優勝の実績を持つ陸上競技部や水球部、全国高等学校総合文化祭で11年連続最優秀賞受賞の新聞部などがある。

設立	2003(平成15)年
形態	全日制・単位制/ 普通科(普通コース・体育コース)/共学
生徒数	1学年約540人
09年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、鳥根大、鳥取大、山口大、香川大、愛媛大、鹿屋体育大、横浜国立大、下関市立大などに計12人が合格。私立大は、酪農学園大、青山学院大、専修大、日本大、明治大、立教大、龍谷大、近畿大、鳥取環境大、広島経済大などに延べ54人が合格。
住所	〒689-2295 鳥取県東伯郡北栄町由良宿291-1
電話	0858-37-3211
Web Site	http://www.torikyo.ed.jp/ikuei-h/

鳥取県立
鳥取中央育英高校

小中高連携

学校種を越えた連携が 生徒の学ぶ意欲を生み 教師の意識改革を促す

変革のステップ

背景

◎隣接する中学校からの提案により、小中高の連携事業を開始。生徒の基礎学力向上と教師の意識改革を目指す

実践

◎12年間の「家庭学習の手引き」作成などで、子どもの学ぶ力を育て、小中高合同の研究授業を通して、教師が刺激し合う

成果

◎小中高の相互理解が深まると共に、教師の意識改革が進む。中学校教師の意見も取り入れた学び直し教材を独自に作成

小中高の連携事業により
積年の課題克服に挑む

「『向ヶ丘』に立つ学校同士、一緒に出来ることはないでしょうか」。鳥取県立鳥取中央育英高校の浪花良孝校長のもとに、隣接する北栄町立大栄中学校の中川昇前校長から連携の打診があったのは、2006年末のことだ。北栄町の向ヶ丘には大栄中学校、北栄町立大栄小学校、そして同校が、数百メートルの距離で位置する。大栄小学校のほぼ全員が大栄中学校に進学し、大栄中学校から同校に進学する者も毎年数十人になる。しかしそれまで、部活動などで若干の交流がある他は、踏み込んだ連携はなかった。大栄中学校にとって、生徒の学習意欲をいかに高めるかは積年の課題だった。中学生は高校受験を意識するが、入学後の学びまではイメージ出来ていない。高校での学びがどのようなのか、そのために必要な力は何かを知ること、中学校での学びや行事にもっと前向きに取り組むようになるのではないかと、期待があった。鳥取中央育英高校にとっても、中学校との連携は飛躍のチャンスだった。同校は03年に、鳥取県立由良育英高校と鳥取県立赤碕高校が統合再編して開校したが、当時、大きな課題があった。再編3年目に赴任した前田幸男先生は次のように振り返る。

「赴任当初、私が持っていたイメージに比

べ、生徒に学ぶ意欲や態度、学習習慣が不足していると感じました。教師が互いに再編前の各校の文化や校風を尊重して気遣うあまり、学校の方向性を定めきれっていないようでした」

生徒の学力低下も深刻だった。再編から年を経るごとに成績下位層が拡大し、文章を読み取れない、文法が理解できない、定着まで時間がかかるといふ生徒が増えていった。

「出来ることを模索してみましょう」。連携の打診に、浪花校長はそう即答した。中高連携によって基礎学力が定着した学習意欲の高い生徒



鳥取県立鳥取中央育英高校校長
浪花良孝 Naniwa Yoshitaka
教職歴36年。同校に赴任して4年目。「モットーは「為せば成る」」



鳥取県立鳥取中央育英高校
齋尾博幸 Saito Hiroyuki
教職歴27年。同校に赴任して9年目。渉外担当。国語科主任。「継続は力なり」ということを生徒に伝えていきたい」



鳥取県立鳥取中央育英高校
徳住彰啓 Tokunami Akihito
教職歴23年。同校に赴任して7年目。教務主任。「将来、キラリと輝いている自分を思い描いて今を頑張るべし」



鳥取県立鳥取中央育英高校
前田幸男 Maeda Yukio
教職歴11年。同校に赴任して5年目。進路指導部。3学年担任。「感謝の気持ちが行動の原動力」

を育成できれば、大学入試においても地域の期待に応えられるだろうと考えた。ただし、浪花校長の思いはそれだけではなかった。

「進学実績の向上もさることながら、中学校の先生方との交流を通して、本校の教師の意識を外に向けられると思いました。教師一人ひとりが、小中高、そして大学へと続く指導の連続性を意識し、授業改善や指導力向上に取り組むことによって、学校全体の教育力を高められればと考えたのです」

「小中高の共通テーマは「学習習慣の定着」」

07年度、小中高3校による連携事業「向ヶ丘レインボープラン」が動き出した。しかし、子どもの発達段階はもちろん、教科指導に対する考え方や学校文化も異なるため、すぐに踏み込んだ連携をするのは難しい。そこで、初年度は「出来ることから」という共通理解の下、3校の交流に重点を置いた。大栄中学校が主幹校となり、公開授業や研究授業など教師の交流、体験授業や部活動など生徒同士の交流を推進した。教師間の相互理解が進んだ08年度は、牧尚志教頭と横山尚登教頭が中心となり、連携を一歩進め、3校共通のテーマを設定し、小中高の連続性を意識した活動に取り組んだ。テーマ設定は、08年度の主幹校となった鳥取中央育英高校

が積極的に進めた。校内での検討の結果、決定したテーマは「学習習慣の定着」だった。

「学習習慣の定着は高校教師が苦慮していることですが、小中学校でも同様に感じているに違いないと考えました。当案を連絡協議会で提案したところ、予想通り、即座に小中の先生の賛同を得られました」（浪花校長）

また、取り組みの前提となる「学力」を、次の三つに定義した。①学ぼうとする力（モチベーション）、②学ぶ力（学びの方法や姿勢、態度）、③学んだ力（結果として身に付く力、数値で測れる力）だ。連携事業では、①と②を重視し、学習規律と家庭学習習慣を確立させて、学ぶ意欲の向上を目指すこととなった。

代表的な取り組みは、年1回の「上級学校授業体験」だ。従来行っていた夏休みの体験入学は希望者のみを対象としていたが、上級学校授業体験は、大栄中学校の当該年度の3年生全員を対象とした。授業は国数英理社および体育。教科の魅力を伝えると共に、高校と中学との違いを意識させ、中学校の学習がいかに大切かを伝えられるかが、教師の腕の見せ所である。教務主任の徳住彰啓先生は次のように述べる。

「数年前、大栄中学校からの入学者13人のうち一部の生徒が、1年生の早い段階で退学しました。生徒の成績は悪くありませんでしたが、中学校とのギャップに悩み、退学・転学という選択をしたのです。学校は何か出来

図1 12年間を見通した「家庭学習の手引き」算数・数学の例

小学校	1・2年生	①プリント ②ドリル ・正確に計算できるように、正しい計算手順を確実に身に付けましょう。 ・正しく計算できるようになったら、徐々に早く出来るように繰り返し練習しましょう。
	3・4年生	①計算ドリル ②算数の教科書 ③プリント ④その他 ・かけ算や割り算など正しい計算手順が身に付くよう、毎日練習しましょう。 ・三角定規や分度器、コンパスなどが正確に操作出来るように繰り返し練習しましょう。
	5・6年生	①計算ドリル ②算数の教科書 ③プリント ④その他 ・概算など予想を立てて計算しましょう。 ・計算力を向上させるために、よく間違える計算は繰り返し練習しましょう。 ・答えの確かめを自分で出来るようにしましょう。
中学校	予習復習	・授業の復習は必ずする。 苦手な人…練習問題の内容や教科書問題を、解き方、解答も含めて、考えながらノートに写す。 得意な人…問題だけをノートに写し、もう一度、自力で解いてみる。 ・教科書以外の問題にも取り組み、さまざまな問題に慣れる。 解き方のコツをつかむ。
	自学	・よりレベルの高い問題に取り組む。 ・1日1ページノートに記入し、復習や演習に取り組む。
高校	予習	・ノートに教科書の内容(重要事項や定義、定理など)をまとめる。 ・例題、基本問題、練習問題を解く中で、理解できるところと理解できないところを明確にしておく。
	授業	・予習でまとめた内容以外で、説明されたり付け加えられたりした内容を理解しながらノートに書き取る。 ・授業中に解いた問題の中で、重要事項や新たな疑問点を明確にする(授業後に先生や友だちに質問し、疑問点を解消する)。
	復習 演習	・宿題をしながら、学習内容を定着させる。 ・教科書応用問題集を利用し、授業で扱った類題を解いて授業の振り返りを行うと共に理解を深める。 ・参考書や教科書応用問題集の応用問題を活用し、学習内容が定着しているか繰り返し確認し、実践力を養う。 ・課外の教材や校外模試等を利用し、受験力を高める。

小中高12年間を俯瞰する 自学自習の在り方を提示

小中高合同で作成した、国数英理社の家庭学習のポイントをまとめた冊子「家庭学習の手引き」(図1)は、「学ぶ力」の育成を目指した取り組みだ。小中高各校で教科ごとに家庭学習でしてほしいことをまとめ、代表者2人が持ち寄

たのではないかとずっと引掛かっていた。今は、高校入学後の姿を具体的に思い描かせることで、高校進学への心構えを身に付けてもらえるのではないかと期待しています

って合同編集会議を開き、12年間の連続性を加味して修正を加えた。編集会議は8回に及んだ。最も苦労した点は、どのように小中高の連続性を持たせるかだ。そこで、小学校では「学習習慣を身に付ける」、中学校では「学力を支える『予習』『復習』『自学』の3本柱」、高校では「『予習』授業→復習→演習」の「黄金の4サイクル」を確立する」と連続性のある目標を設定し、それを軸に各教科の内容を詰めていった。

学校段階に応じた保護者の役割を明記したことも、特徴の一つだ。「温かい励ましの言葉や助言でやる気が増します」(小3・4年生)、「親としての姿を見せ、自らの経験を伝えることも

小中高合同の研究授業で 教師の意識改革を促す

連携2年目の08年度には、教師同士の交流も活発に行った。各校で実施する校内研修会に積極的に参加し、特に国数英は「中高授業交流」として、研究授業を数回実施した。研究授業は、出来るだけ多くの教師が参加できるように、小中学校で授業のない日の午後を設定。授業後は、小中の教師を交えて教科ごとに研究会を開催し、

大切(中学校)、「子どもの進路に積極的にかかわってください」(高校)など、子どものかかわり方を具体的に記した。これに対する、保護者へのアンケート結果では、「家庭学習の大切さが理解できた」は97・5%、「小中高のつながりがよく理解できた」は92・7%(共に1年生の保護者)と手引きの効果がうかがえる。

冊子の共同制作は、各学校の教師にとって、自分たちにはない視点に気付く機会となった。「小中の先生と意見交換をしながら制作することで、さまざまな気付きがありました。例えば、『この冊子を目に付くところに張り、常に確認出来るようにしよう』と指示を入れることや、『ここは向ヶ丘レインボープランをイメージさせる虹色の配色にしよう』など、小学校の先生のきめ細かな目配りには本当に驚かされました」(前田先生)

意見交換をした。

「指導案の作り方や授業展開など、小中の先生方から学ぶことはたくさんありました。そして、ノウハウ以上に刺激を受けたのは、互いの授業について率直に意見を述べ合う姿勢です。高校教師は、他の先生の授業について遠慮しがちで、厳しい発言をあまりしませんが、一方、小中の先生方は『授業展開の意図が分からない』などの意見もはっきり述べていました。高校内だけでは得られにくい刺激を受けたことは、自分の授業を振り返る良い機会になったと思います」（浪花校長）

学校間の交流が深まるにつれて、互いのノウハウを吸収しようとする意識も高まった。09年度には、同校は小学校から「模試分析の方法を伝授してほしい」という依頼を受けた。文部科学省の全国学力・学習状況調査や鳥取県下で行う学力診断テストなどで得たデータを児童の学力向上に結び付けるために、高校が持つ模試分析のノウハウを生かそうと考えたのだ。

「小中高が互いの指導方法を共有することで、地域の子どもたちは地域で育てようという意識が根付きつつあります」（浪花校長）

独自の学び直し教材で基礎学力定着を目指す

09年度には、同校独自に基礎学力の定着を目

指した取り組みを始めた。高校での学びに最低限必要な中学校レベルの国数英の内容をまとめた冊子『真の育英生となるために』（図2）だ。同校入学予定者へ合格者登校日に配布し、入学までに各自で一部取り組ませる。入学後はオリエンテーション合宿の教材として1教科5時間をかけて指導。合宿後の1週間でも理社や保健体育などの授業を調整して特別時間割とし、1日2時間、冊子の問題演習に取り組ませる。それ以降も適宜、各教科で活用し、最初の定期考査では冊子からも出題し、定着度を測る。

特にページを割いたのが現代文だ。文の成分、品詞の種類、活用の方法、接続語や指示語まで幅広く網羅した。その狙いを国語科の齋尾博幸先生は次のように述べる。

「本校の生徒の弱点は文法です。授業をしていて、読解力が弱いのは、口語文法が理解できていないからだと分かり、現代文の読解力を身に付けさせる必要があると考えました。『中学校では分からなかったけれども、勉強し直してみると意外に簡単でした』という生徒も多く、分かったという体験が国語に対して前向きに取り組む姿勢につながっています」

読解力向上は他教科にも好影響を及ぼした。「数学では、文章題に取り組む姿勢が積極的になっています。文の意味を理解したり、問題の意図を読み取ったりする楽しさが、だんだん分かかってきたようです」（前田先生）

図2 「真の育英生となるために」（抜粋）



国語57ページ、数学12ページ、英語20ページと、全体の6割が国語で占められる。なかでも、「文法の学習」は50ページにわたり、徹底的に基本を身に付けさせる内容となっている

冊子は毎年改訂予定。09年10月に開いた次年度用の改訂会議には、県内中部地区の中学校から教師を招き意見を聞いた。難易度や内容、配列、量など、中学校の視点からアドバイスを得ることで、より効果的な学習教材にするためだ。

「向ヶ丘レインボープラン、学び直し教材、どれも今の形がベストとは思っていません。小中との連携をより深めて取り組みを改善し、学力を高め、教師一人ひとりの指導力向上に結び付けたいです。学校が頑張れば地域は応援してくれます。しかし、学校に元気がなければ、地域から背中を押してもらうことは出来ません。高校が小中学校や地域と一緒に歩んでいくことで、更に高い教育効果を生み出せるのではないのでしょうか」（浪花校長）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2009年9月号地方公立高校の挑戦「**広島県立加計高校芸北分校**」など
▶▶▶ <http://view21.jp/k9643>

次年度につなげる総括・引き継ぎと 3年生からのデータ収集

2月、3月は3年生の進路決定の山場であり、また高校入試などの行事もあることから、1、2年生の指導に時間を掛けることはなかなか難しいのが実情だ。しかし、次年度への意欲を高め、生徒自身が仕切り直しをするための後押しとなる指導はやはり重要。また、自校の指導の成果の結晶ともいえる卒業生からのデータ収集も積極的に行いたい。

※データは、高校の先生方へのヒアリングを基に編集部が作成したサンプルです

教師の総括のために

図1 教師が指導を振り返るための質問項目

ダウンロード

- 最もクラス全体が盛り上がったことは何？
- 最もキミが楽しかった時間は？
- 最もキミが頑張ったことは何？
- 先生の言葉で印象に残っていることは？
- HR、面談で、やる気がアップしたことはあった？
- 先生との一番の思い出は？

生徒が書きやすい□のような項目をまず盛り込んで、その後、指導の振り返りにつながる■のような項目へと導いていくと生徒は回答しやすい

前向きな引き継ぎのために

図2 長所や得意なことに目を向けた引き継ぎシート

ダウンロード

組	番号	名前	生活面での長所					得意教科				コメント	
			学校行事	掃除	提出物	授業態度	皆勤	係・委員会	国語	数学	英語		地歴公民
1	1	○○○○	○					○	○	○			文化祭の役員を一生懸命務めました
1	2	●●●●		○	○	○						○	掃除はいつもマジメに取り組んでいます
1	3	◎◎◎◎	○		○	○		○	○				提出物の内容はいつも正確で、締め切りも守ります
1	4	□□□□		○				○			○	○	英語の成績がここ半年で伸びました

※ウェブサイトには上記のシートの他に、詳細バージョンのシートもアップしています

図3 3年間の目標設定と振り返り

ダウンロード

1年

学習目標	生活目標	部活・課外目標
・振り返り	・振り返り	・振り返り

2年

学習目標	生活目標	部活・課外目標
------	------	---------

次年度の冒頭に当該学年の目標を生徒に書かせて、年度末に総括させる。これを翌年度に引き継ぎ、高校生活での成長と変化の履歴を生徒自身が把握出来るようにする。新2年生は2年、3年分を一つのシートにして使用する。

1
1年間の総括と引き継ぎでプラスの雰囲気づくり

ダウンロード

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

プラスαの指導

生徒の「褒める視点」を学年で共有する

「欠席が減った」「遅刻をしなくなった」といった生徒の変化や、「成績の急上昇」「課題提出率が100%になった」などの学習面での頑張りなど、「褒めるべき生徒のプラスの変化」は、どのようなものがあるかを学年団で共有する。その視点で生徒をピックアップし、引き継ぐのも効果的だろう。掃除やあいさつ、クラス行事への参加など、日々の学校生活の一つひとつの活動が評価の対象になり、それらを大切にすることが、進路実現という大きな成果につながることも教師間で確認したい。

生徒アンケートで教師の気付きを得る

「先生の話で印象に残っていることは何か」「文化祭やクラスマッチなど、クラスでの取り組みで特に思い出に残っているものは何か」といった質問には、教師が予想していなかった回答が寄せられることもある。教師自身はあまり意識していなかったさりげない一言やちょっとした指導が、生徒に大きな影響を与えていることも多い。教師一人ひとりが自身の言動などを振り返ると共に、今の高校生の感受性を理解する資料として、学年団でも共有しておきたい。

HRでのプラスの雰囲気づくりで次年度につなげる

年度の最後のHRや学年集会では、「褒める」「認める」「感謝する」ことを意識して、生徒のモチベーションを次年度にうまくつなげていきたい。その際、4月の時点で決めたルールや、教師が年間を通して繰り返し訴えた母校としての心掛け、クラス目標などで、出来た部分をクローズアップして褒めるようにする。その上で、出来ていない部分を次年度の課題として指摘しつつ、なお一層重要な目標として取り組んでいくことを確認すると良いだろう。

活用後のフォロー

◎総括のための生徒アンケートや、引き継ぎ資料などは、書かせっ放しや、つくりっ放しにならないようにしたい。日々の声掛けの材料にするのはもちろん、年度中にコメントを加えて生徒に返したり、新担任の面談の資料にするなど生徒とのコミュニケーションツールとしても活用したい。特に、新担任に長所や得意なことを知ってもらうことは、信頼関係の醸成につながる。なお、総括や、引き継ぎ資料の作成は、一度にやろうとすると大変になる。年度当初から、総括を意識した定点観測を学期ごとなどで行っていきたい。担任は、新年度の初めに図2のシートを作成して、更新していても良いだろう。

データ活用のねらい

前向きな総括と引き継ぎを

クラス・学年を前向きな集団にすることを最優先に●2月、3月は、教師は高校入試などで時間的な余裕がなくなり、1、2年生の生徒に手を掛けにくくなる時期である。それだけに、優先順位を決めて指導に臨むことが重要だ。中でも優先したいのは、クラス・学年を前向きな気持ちで次学年へ向かわせること。HRや学年集会などで、クラス・学年の1年間の振り返りをしっかり行いたい。「このクラスは、こんなところが1年間で大きく成長した」「この学年は、こんな行事で感動的な盛り上がりを見せてくれた」など、具体的に例を挙げて評価することがポイントだ。

前向きな引き継ぎを●次年度にうまくつなげていくためには、個々の生徒についての引き継ぎをしっかりと行っていくことは重要。その際、注意点、問題点だけに終始せず、生徒を「褒める」材料を多く引き継ぎたい。新担任が前向きな気持ちで生徒に向き合えるようになれば、その生徒も新しい1年を意欲的にスタートできる。

データ活用の流れ

個々の振り返りから次の目標設定へ

生徒アンケートを生かした教師の総括●生徒に手を掛けにくい時期だからこそ、アンケートなどで、生徒に1年間の振り返りを行わせ、次年度への生徒の意識を高めたい。その際、生徒自身による学習・生活・部活動などに対する総括に加えて、教師が指導を振り返るための質問項目も盛り込む。図1などの項目を用いれば、教師の言動や、クラスの様子、進路行事の振り返りなどが出来るだろう。更に、この内容は、学年団で共有しておきたい。

「褒める」材料を引き継ぐ●個々の生徒の引き継ぎは、図2のように「褒める」材料となるような「前向きな」事実情報を中心とした資料を基に行うようにする。更に、生徒自身に図3のようなシートで次年度の目標を書かせ、それを新担任に提出させる。1年間保管し、学期末・年度末の振り返りに役立てると良いだろう。

次年度につなげるための引き継ぎを意識する

生徒の総括用アンケートに、教師が指導を振り返るための質問項目を盛り込む(図1使用)

クラス担任ごとに、引き継ぎ資料を作成(図2使用)

生徒アンケート、引き継ぎ資料の内容を学年団で共有(図1、図2使用)

新年度の初めに、各学年で、生徒個々に目標を考えさせる(図3使用)

図4 卒業前の3年生に聞いておきたい質問一覧

ダウンロード

すぐに回答できる質問	回答に時間がかかる質問
<ul style="list-style-type: none"> 各学年の各学期で、平日は何時間勉強していましたか 各学年の各学期で、平日は何時間勉強すべきだったと思いますか 各学年の各学期で、平日は何時から自宅学習を始めていましたか 各学年の各学期で、平日は何時から自宅学習を始めるべきだったと思いますか 受験を意識した勉強をスタートさせたのはいつですか 志望校（進みたい進路）が固まった時期はいつですか 	<ul style="list-style-type: none"> 受験勉強を頑張れた要因は何ですか 3年間の学習でいつが最も大事だと思えますか 部活動を通して、身に付けたものは何ですか 3年間で一番つらかった時期はいつですか、それはなぜですか 勉強中のストレス発散法は何ですか 成績が一番伸びたのはいつですか、それはなぜですか 〇〇高校に入ってよかったことは何ですか

卒業式の予行日など、3年生がそろう日に実施したり、用紙を配布して、記入した生徒から持ってきてもらったりするなど、多忙な3年生に負担がかからないような工夫が必要。すぐに回答ができるような設問は卒業式予行の日で、回答に時間がかかるものは事前配布などと区別しても良いだろう。

図5-1 卒業生のデータ例（卒業生の模試成績と、大学の様子や後輩へのアドバイス）

ダウンロード

エリア	進学先	1年生11月模試 (国数英総合)	1年生1月模試 (国数英総合)	大学の様子	後輩へのアドバイス
関東	●●大	60	64	私の進学した大学の一番の特徴は、資格取得に関する大学のバックアップが充実しており、学生の資格に対する意識もとても高いことです。1年次から受講できる資格試験対策講座がいくつも開講されています。	大学に入って驚いたのは、同じ1年生の就職・資格に対する意識の高さ。講義も卒業後の進路を踏まえて選択しています。高校の段階でも、大学でどんな勉強をして、それをどんな分野で生かしたいのかよく考えよう。
東海	〇〇大	54	62	生物学系の研究施設の充実度は、国内でも屈指だということです。大学院の研究もレベルが高く、ほかの大学から進学を希望する学生も多いため、学部から進学する方が有利な	1年生の春休みにこの大学を志望校に決め、英語、数学の基礎固めを始めたことが、合格につながりました。入試で差がつきやすいのは、対策にかかると時間がかかる教科です。早い段階か

図5-2 データ活用スケジュール

ダウンロード

使用する質問項目	作成データ	狙い	時期
実際の大学生活はどのような様子ですか？ 後輩へのアドバイスも含めて教えてください。	卒業生の模試成績と、大学の様子や後輩へのアドバイス（図5-1）	生徒の進路意識を高める	●5月の連休前 ●各学年夏休み明け
模試受験の前に、「準備・復習」はしていましたか？	模試の受け方による模試成績の違い	模試の準備・復習の重要性を伝える	●各学年模試の1か月前 ●各学年模試直後
校内データで作成可能	合格大グループ別3年間の評定平均値	日々の授業の重要性を伝える	●4月当初 ●各学年夏休み明け



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご利用ください！ 右のウェブサイトをご覧ください。ただけです。

●2006年4月号
「入試結果データの見せ方」

●2009年2月号
「1年生春休み前後の学習意識の向上」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>
生きたデータの徹底活用 クリック!HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→
生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください加工可能な資料が
ダウンロードできます!生徒指導・
進路指導ツール集ウェブサイトから
ダウンロード!

プラスαの指導

「協力してほしいこと」を一覧化して卒業生に配布する

夏休みの進路相談や進路講演会など、卒業生の協力が不可欠な行事を実施している学校も多い。卒業生に特に来校してほしい時期、行事を一覧表にまとめ、卒業前に配布しておきたい。後輩の役に立ちたいと思っている卒業生にしてみれば、来てほしい日を学校側から事前に連絡してもらえれば、協力もしやすくなる。また、「この大学・学部の卒業生に集まってほしい」など特定の生徒の協力が必要な場合は、卒業式前に直接依頼しておくようにする。

在校生に役立つ情報を意図的に収集する

卒業生の本音、生の声は、高校生の意識を知る上で非常に重要な資料になる。しかし、在校生の指導に生かすという観点から考えれば、あまりに個人的な体験や、偏った意見は利用しにくい。アンケートで情報収集する際には、在校生の参考になるような回答例を示したり、「後輩が予習復習の大切さに気付くようなアドバイスをしてほしい」「模試の復習の重要性を理解させたい」「早く志望校を決めることのメリットを強調してほしい」など指導の狙いを明記しておくとういだろう。

進路指導部用メールアドレスで一元管理

多くの場合、卒業生と教師の個人的なつながりで情報収集をしているようだが、中心となる教師が異動すると、卒業生からの情報収集も停滞してしまう。「学校全体でのデータの蓄積」「多忙化の抑制」「個人情報の管理」などを考えると、進路指導部用に固定のメールアドレスを取得し、特定のコンピューターで一元管理するのが望ましい。年度途中で卒業生にアンケートを実施したい時や、協力してほしい行事への参加を促す時などにも、進路指導部のメールアドレスから案内を送付する。

活用後のフォロー

◎卒業生が3年間を振り返ったデータ、更に大学進学後の体験などをしっかり収集しておけば、かなり有用なデータが作成できる可能性が高まる。卒業生のアンケートなどは、3年間の指導を見通した上で学校全体の情報収集として実施する方が効果的かつ効率的だが、それが困難な場合は、いくつかのクラスや何人かの生徒だけでも実施してみるとよい。そこで得たデータを他の教師とも共有することで、「卒業生のデータを今後も蓄積していくことの重要性」が意識付けられ、学校としてのデータ活用に対する意識が高まるだろう。

データ活用 のねらい

卒業生の影響力を生かす

卒業する3年生から情報収集する ●生徒にとって、同じ高校の先輩の言葉は、極めて身近な存在からのアドバイスとして受け入れやすいものだ。そのため、3年生の体験や振り返りを在校生への指導の資料として活用することは非常に有効だ。卒業式の前に、アンケートなどで体験談などを収集し、また、彼らの体験を母校は今後も必要としていることを伝え、学校とのつながりを意識させておくことは重要だろう。

活用シーンをイメージし、教師が共有する ●卒業生から収集した情報は、事あるごとに、在校生へ効果的なデータとして紹介できるように管理する。できれば、あらかじめ、いつどのようなタイミングで、どの生徒に活用するかなどを共有しておきたい。先を見通すことで、データ収集・作成を余裕をもって行える。

データ活用 の流れ

先を見通した情報収集

実施・収集方法をしっかりと考えておく ●3年間の指導の中で、「卒業生の声」をどのシーンで使うのか、あらかじめ見通してアンケートの収集などに臨みたい。例えば、学年団で1年間の指導を振り返り「この学年の指導で、卒業生の声があれば役に立ったのはどんな時だったか」を話し合うのも一つの方法だろう。その際には、**図4**のようなリストを参考にアンケートの内容を決定する。また、HRなどで生徒に「卒業する先輩に聞いておきたいことは何か」を尋ねてもよいだろう。

収集情報の生かし方を共有する ●卒業生へのアンケートでさまざまな情報を収集したら、それを今後どのように活用していくか、先を見通しておくことが重要。収集したデータはどんな形で生徒に見せることができるのか、**図5-1**のように実際のデータのイメージを共有しながら、**図5-2**のような計画表を作成し、各学年共有の財産として管理しておきたい。

卒業生の データは どう生かすかを 検討しておく

卒業生に聞いておきたい質問項目を、決定する(図4使用)

卒業式予行などの卒業前に時間をとったり、アンケートを配布しておき返送してもらったりするなど、工夫して実施、収集する

聞いた内容をどの時期にどのように加工して使うかを考える(図5-1,2使用)

収集した情報を学年団で共有、蓄積していく

クロマグロの特性を解明し 配合飼料の開発から安定供給を目指す

近畿大 水産研究所 滝井健二研究室

近畿大水産研究所は、2002年に世界で初めてクロマグロの完全養殖を成功させ、07年にはこれを「近大マグロ」と名付けて販売を始めた。クロマグロ養殖の研究は30年余りにわたり、21世紀COEプログラムから08年度にはグローバルCOEプログラムにも選定された。滝井健二教授は、その中でも魚の生育に欠かせない飼料の開発を担当。餌だけでなく、魚の生態にも着目し、クロマグロが好む飼料の開発に成功した。滝井教授に研究の苦勞と飼料開発の意義について聞いた。

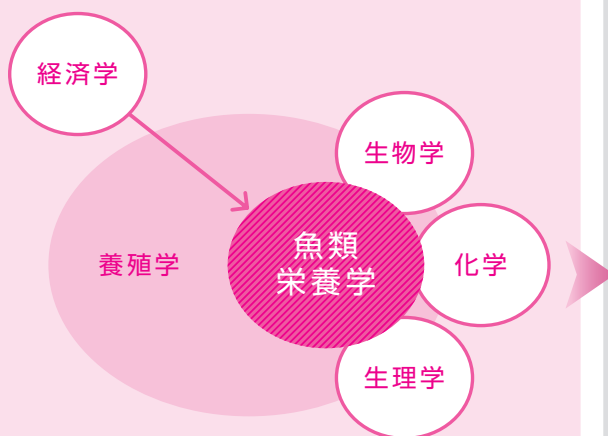
フローチャートで分かる滝井研究室

大学院生の 主な出身学部

水産学部

◎大学院生の9割は水産学分野の出身者で占められる。近畿大からの内部進学者は8割程度。マグロの研究がしたいという他大学からの進学者や、マレーシア、パナマ、フランスなど、海外からの留学生も増えている。

研究にかかわる 学問と研究内容



◎魚類栄養学では、魚類と飼料との関係を栄養学的に解明する。生理学や生物学、化学などを土台に、魚種に適した飼料の開発、給餌法、魚の味覚や臭覚の研究、代謝や消化のメカニズムの解明などを行う。21世紀COEプログラムの選定以降は、品質検査、流通・販売、環境保全など総合的な研究体制を整備し、社会科学分野の研究者との共同研究も増えている。

研究成果と 社会のかかわり

養殖魚の価格低下

環境負荷の軽減

動物性タンパク質
の確保

など

◎高級魚が安定して大量生産出来れば、良質な動物性タンパク質の安定供給と市場価格の低下が見込める。特に飼料代は生産費用の半分を占めるので、より安全で廉価な飼料の開発は養殖業の発展の鍵を握る。また、魚粉の代替飼料の開発は海洋汚染の防止にもつながる。



滝井健二 教授 Takii Kenji

高知大学院農学研究科修士課程修了。
専門分野は魚類栄養学、栄養生理学、栄養化学。
高知大農学部教務補佐、近畿大水産研究所助手、
同研究所助教授を経て、
近畿大水産研究所・大学院農学研究科教授。
研究テーマは、魚類用配合飼料の代替タンパク源、
魚類の消化吸収およびエネルギー収支、魚類の栄養素代謝。

研究分野の概要

配合飼料の開発で クロマグロの安定供給、 資源保護を目指す

2002年、本
研究所は32年の歳
月をかけて、それ
まで不可能といわ
れていたクロマグ
ロの完全養殖に世
界で初めて成功し
ました。完全養殖

とは、人工ふ化から育てた成魚が産
卵し、更にその卵を人工ふ化させて
成魚にまで育て、その成魚がまた卵
を産むという一つのサイクルを完成
させることです。

水産養殖の研究分野は、採卵や種
苗量産技術、養成技術などの確立、
汚染・環境負荷の構造の解明、鮮度
保持や加工法の改善、安全性の確認、
流通など多岐に渡ります。その中で、
私は「魚の飼料」について研究して
います。飼料開発に当たっては、魚

類の味覚や臭覚、消化吸収の機能、
各栄養素の要求量と代謝について明
らかにする必要があります。また、
養殖産業の発展を考えると、価格を
考慮することも重要な課題です。

これまで、魚の養殖には生き餌が
多く用いられてきました。しかし、
生き餌に含まれる栄養素が海水に溶
け出し、赤潮を引き起こすことが問
題視されていきました。そこで、栄養
素の流出が少なく、栄養バランスに
も優れた人工配合飼料が注目される
ようになったのです。配合飼料には、
イワシ類、アジ類、サバ類などを乾
燥させて粉末にした魚粉が多く用い
られます。しかし、これでは魚に魚
を与えることになるため、結果的に
魚資源の減少につながります。魚粉
に代わる安価な動物・植物・微生物
タンパク質源を利用した配合飼料の

開発が必要とされたのです。

日本は、世界で漁獲されるクロマ
グロの8割を消費しています。マグ
ロ類の漁獲規制が世界規模で行われ
ている今、クロマグロの養殖技術を
発達させ、養殖産業の発展につなげ
ることは、日本の責任ともいえます。
また、これは天然のクロマグロの保
護にもつながるのです。

養殖技術の向上には、配合飼料の
開発が一つの鍵になります。また、
養殖経費の半分を飼料代が占めるた
め、配合飼料の低廉化が実現すれば、
最終的に高級クロマグロを安く賞味
出来るようになるのです。

研究内容

失敗の積み重ねた 生まれた 最適な配合飼料

本研究所がク
ロマグロの完全養殖
に成功した02年に、
私は配合飼料の開
発に着手し、09年
には、0・25グラ
ムのクロマグロの
稚魚が1キログラ

ムになるまで問題なく成長する配合
飼料の開発に成功しました。

それまで、クロマグロ用配合飼料
の開発は、日本、オーストラリア、
ヨーロッパの各大学・研究機関で挫

折を繰り返しながら進められていま
した。クロマグロの養殖で特に問題
だったのは、他の養殖魚の配合飼料
を基にした飼料では、クロマグロは
全く食べないか、食べてもわずかな
量で成長しないということでした。
クロマグロだけが、他の魚と必要と
する栄養分が大きく違うとは考えら
れません。しかし、長くこの壁を崩
すことが出来なかったのです。

そこでまず、配合飼料を食べさせ
るために、クロマグロが好む味を調
べました。その結果、人間も「うま
い」と感じるイノシン酸やグルタミ
ン酸を好むことが分かりました。そ
こで、これらを添加した配合飼料を
与えたのですが、稚魚は食べるもの
の、成長面ではそれほど改善されま
せんでした。

続いて、クロマグロの消化吸収能



写真 生き餌の代替となる、当研究室
で開発した配合飼料。栄養バランスは
もちろん、大量に餌を摂取するクロ
マグロの消化器系に配慮してつくら
れている



写真 和歌山県にある近畿大浦神実験場の生けす。時期によって異なるが、主にクロマダゴロやトラフグ、マダイなどが養殖されている

力を調べたところ、とりわけ魚粉に対する消化力が低いことが分かりました。クロマダゴロの成長はブリやマダイの5〜10倍で、この成長の速さを支えるには大量の餌が必要です。しかし、消化しにくい飼料では吸収に時間がかかり、成長の速度を維持するだけの量を食べられません。配合飼料によるクロマダゴロの飼育の難しさは、この点にあります。

魚粉は製造過程で高温処理されるので、タンパク質が大きく熱変性します。おそらく、この変性がクロマダゴロのタンパク質消化酵素の働きを妨げていたのでしょう。

魚粉の消化に問題があると分かっていたので、私はそれに代わるタンパク

質源を探しました。そしてついに、クロマダゴロは微生物起源のタンパク質分解酵素で処理した「酵素処理魚粉」に対する消化力が優れていることが分かり、09年にクロマダゴロ用配合飼料の完成にこぎつけたのです。

クロマダゴロの産卵期は真夏のため、試験に用いる稚魚の生産は晩夏から秋に限られます。年に2、3回しか研究出来ず、完成までに7年の歳月を要しました。それだけに、配合飼料にクロマダゴロの稚魚が群がっている光景を見た時は感無量でした。

高校生に伝えたいこと

予想を裏切るデータこそ

研究へのモチベーション

私が水産に興味を持ったのは、高校生の時にテレビでクロマダゴロが一尾何百万円もする」と知り、「これは大もうけできる」と思ったことがきっかけです。しかし、水産学科で学ぶうちに種々の漁獲・漁船制限や多額の費用がかかることを知り、クロマダゴロを獲るのでなく、「魚をつくり、育てる」⁴方に進もうと考えました。折しも、生き餌から配合飼料への転換が叫ばれ始めた時期で、配

合飼料の研究は将来性のある分野だと思ひ、魚類栄養学を専攻しました。研究の過程では苦しいこともあり

研究の過程では苦しいこともあり、クロマダゴロ用配合飼料の研究を始めた頃は思うようなデータが得られず、日々、プレッシャーを感じていました。しかし、研究で「楽しい」と感じるのも、期待とは異なるデータを得た時です。魚の種類は2万種にも及び、同じ種類でも系群や個体による差があります。そのため、予想外の結果が出ることもあり、それらを新しい発見や興味へつなげることに面白さがあるのです。

高校生の頃に抱いた「漁師になりたい」という夢とは異なる道に進みましたが、大学で目的意識を見いだせたからこそ、現在の自分があると思います。今の学生はまじめで多くの知識を吸収して卒業しますが、「こんな研究をしたい」という目的意識が希薄であるように感じます。

高校生の皆さんには目的意識を持って大学に進んでほしいと思います。入学時にはなくても、在学中に目標を定めてほしい。新しい研究もそうした活気の中から生まれ、形になっていくのではないのでしょうか。

用語解説

① クロマダゴロ

日本沿岸で捕れるマダゴロの中で最大種。成魚の中には体長3メートル、体重400キログラムに達するものもいる。稚魚は皮膚が弱く、触れると死んでしまい、成魚になっても光や音に過敏で、パニックを起こして生けすの網に激突しやすいため、完全養殖は不可能とされていた。

② 赤潮

植物プランクトンの異常増殖により、海水が赤褐色や茶褐色に染まる現象。海水中の酸素が大幅に減少するため、その海域に生息する魚貝類などが死滅し、漁業に甚大な被害を及ぼす。

③ マダゴロ類の漁獲規制

09年11月、大西洋まぐろ類保存国際委員会（ICCAT）において、日本は10年の東大西洋と地中海のクロマダゴロ漁獲枠を09年比約4割減とすることで各国政府と合意した。日本の国別割当量も、09年の1871トンから1148トンになる。同海域産のクロマダゴロの半数は日本が消費しており、水産業や食品業への影響は大きいといわれている。

④ 生き餌から配合飼料への転換

かつては、生の小魚をそのまま、あるいはミンチにして、魚の養殖の飼料としていた。しかし、現在では、生き餌は環境負荷や高コストの観点から、日本を含めて多くの国で法律によって使用が制限されている。

代替飼料の開発で安全安価な養殖魚の供給を



伊藤純一さん
Ito Junichi

近畿大大学院農学研究科水産学専攻修士課程2年
(兵庫県・私立近畿大附属豊岡高校卒業)

Q なぜ魚類栄養学を学ぼうと思ったのですか

A 小さい頃から魚を捕ったり飼育したりすることが好きで、将来は漁師や水族館職員のように魚にかかわる仕事に就くことが夢でした。そのため、大学は水産関係の学科に進もうと考えていました。高校2年生の時に、近畿大の水産研究所がクロマグロの完全養殖に成功したというニュースを聞いた時は、驚くと同時に「これだ」と思いました。私も大学で魚の養殖について研

究しようとして、近畿大農学部水産学科に進学しました。

魚の飼料を研究分野に選んだのは、将来、飼料メーカーで仕事をしたいと思ったからです。大学4年生での研究室配属の時は、迷わず、魚の代替飼料について研究する水産増殖学研究室を選びました。

Q 現在の研究内容を教えてください

A 私は、水産養殖・種苗生産の世界的研究拠点の一つである和歌山県の浦神実験場でトラフグの消化吸収の研究を行っています。フグには胃がなく、消化器官は腸だけなので、体の構造をとらえやすいというメリットがあります。魚粉を用いた通常の餌ではなく、植物性タンパク質の代替飼料を与えることで、消化吸収にどのような影響があるのかを調べています。フグを採取してタンパク質や脂質、糖質の消化率を測定したり、フグを解剖して腸の酵素活性を測ったりしています。

研究で大変なのは、生き物が相手であるため、飼育に非常に気を遣うことです。信頼性の高いデータを得るには、実験環境にも常に気を配

り、健康な魚を飼育しなければなりません。水槽を毎日掃除し、水温や溶存酸素量をチェックして、飼育環境を最適なものに出来るように心掛けています。

夏から秋は、他の大学院生と共にマグロの飼育を手伝います。マグロは大量に餌を食べるため、朝5時から夕方6時までずっと餌を与えています。

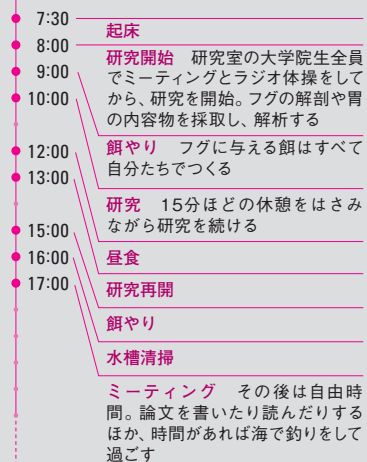
Q 高校生へのメッセージをお願いします

A この研究が進み、代替飼料に関する知見が得られれば、環境に優しい飼料の開発、ひいては安全で安価な養殖魚の安定供給につながります。目標が明確な上、自分の配合した飼料でフグが毎日大きくなっていく様子を見るのは嬉しいものです。苦労以上に、やりがいを感じることの方が多いです。私は目標通りに養殖魚の飼料を作る企業に就職が決まり、今は修士論文の執筆に専念しています。

浦神実験場では、初めて寮生活を体験しまし

た。買い物にも車がなければ出掛けられないような場所にあり、しかも未経験の寮生活とあり、最初はここに来ることをためらいました。しかし、今は長い人生の一時期にこうした経験が出来て良かったと思います。何となく大学に進むのではなく、自分の好きなこと、将来の職業をしっかりと考えて大学を選んでほしいと思います。そして、その夢に向かって目標を立てて努力してください。もちろん、すぐに目標が出来る人ばかりではないと思います。まずは、「目標を立てよう」という気概を持つことが大切なのではないでしょうか。真正面から自分と向き合い、自分の可能性を信じて、何事にも妥協せずに挑戦してほしいと思います。

大学院での伊藤さんの1日



教科書の外に広がる 数学の世界を伝え 学ぶ楽しさを感じさせたい

沖縄県立開邦高校教諭 上江洲 寿

U e z u H i s a s h i

初任校から県を代表する進学校に赴任し、「入試突破力を付けることこそ教師の仕事」と受験指導にまい進してきたという上江洲寿先生。純粋に学びを楽しむ生徒たちとの出会いをきっかけに、自分の授業を見つめ直し、半年間の研修を経て新たな一歩を踏み出した。

かつての私

素朴な疑問を発する生徒の姿が 受験一辺倒の指導を見直す契機に

母校の沖縄県立開邦高校に赴任して2年目に、1年生から3年間の持ち上がりを経験しました。授業や面談などで生徒たちとかかわる中で、担当教科の数学の指導について、ある問題意識が芽生えてきました。きっかけは生徒からの質問でした。「この定理はいつから使われているんですか」「サイン、コサインは誰がつくったんですか」。私はそうしたことを全く知らず、慌てて調べて次の授業で答えました。以降も、さまざまな生徒から、

受験とは関係ないと思われる質問をよく受けました。教科書には定理や公式の説明はあっても、いつ、誰が、どうやってつくったのかは書いてありません。しかし、未知の物事に当たった時には、それが何か知りたいものです。「学び」は純粋な好奇心から生まれるものなのだと、生徒に改めて教えられました。驚いたことに、生徒は「アルキメデスってかっこいい」と自分で調べてみたり、入試には出ないような有名な難問について質問しに來たりしました。そして、難関国立大に次々と合格していったのです。

私は大学入試に直結する指導こそが最も重要だと思っていました。数学がもう少し出来



うえす・ひさし
教職歴12年。母校である沖縄県立開邦高校に赴任して5年目。担当教科は数学。生徒指導部。2009年4月から半年間、沖縄県立総合教育センターで教科研修を受ける。

沖縄県立開邦高校プロフィール◎1986（昭和61）年開校。理数科、英語科、芸術科（音楽コース・美術コース）を設置。2002年度から継続してスーパーサイエンスハイスクールの指定を受ける。◎教員数：52人 ◎1学年生徒数：約240人 ◎2009年度入試合格実績（現浪計）：国公立大は、東京大、東京工業大、大阪大、九州大、琉球大などに計118人が合格。私立大は、上智大、慶應義塾大、早稲田大、立命館大、関西大などに延べ89人が合格。

れば、志望校選択の幅が広がる、また志望校に合格出来るという生徒のために、教科書の知識をしっかりと伝え、解き方の指導に執心していました。数学は公式や定理を覚えるだけでなく、使い方が分からないと正解にたどり着けません。図を描いたり数値を置いて情報を整理したりすることは、数学が得意な生徒は自然に出来ても、苦手な生徒はその手立てすら知りません。そこで、解けない問題をどうにかして解けるようにさせたいと、問題への取り組み方を伝える授業をしていました。

しかし、学問への純粋な興味・関心をぶつけてくる生徒たちと向き合ううちに、教科書にはとどまらない、知識の広がりこそが、受験勉強を乗り越えさせるのではないかと思うようになりました。これにより、入試問題を見る視点も変わりました。難関大の入試問題の中には、数学の歴史的背景や「文化として

の数学」を感じられる問題があると気付いたのです。解法を教えるだけでなく、一つの問題から広がっていく世界を伝えることで、生徒の関心を高め、更には教養を深められるのではないかと考え始めたのでした。

現在の私

数学の教養を深め 学習意欲を喚起させる授業がしたい

3年間指導した生徒の卒業後、2009年4月から半年間、沖縄県立総合教育センターで教科研修を受け、生徒が投げ掛けてくれた課題にじっくり取り組みました。テーマは「数学のよさを感じ得させる数学史活用」の試みです。1年生の三角比の単元で数学史を取り入れた指導案をつくりました。

そして、これに沿った授業を本校で行いました。最初の授業では、約3500年前のエジプト文明に「リンド数学パピルス」という問題集があることを示し、その中の三角関数のタンジェントの起源となる問題に取り組みせました。問題集は日本語訳が出版されているので、私はそれを入手して生徒に見せました。世界史でオリエント文明の分野が終わったばかりとあって、古代エジプト文字のヒエログリフで書かれた問題に生徒は高い関心を寄せました。数学に単に数字だけではない「文化のかおり」を感じてもらえたようです。授

業後のアンケートでは、数学が苦手な生徒から「歴史という別の切り口で数学を捉えられて、面白かった」という声が寄せられました。

今は、他の単元でも教科書とは違う切り口で授業を展開できないかと、指導案と教材の作成に臨んでいます。研修時とは違い、じっくりと教材に向き合うことは難しいのですが、素材を探しては授業で生徒に話しています。生徒から予想に反する反応が返ってきて、うまく授業が展開出来ない場合は、教科書に戻ります。教科書に沿った授業を行ってきた経験があるからこそ、教科書外のことを伝える授業に挑むことが出来るのだと思います。

課題は、私自身の数学的な教養がまだまだ足りないことです。先輩の先生方と授業や数学について話をしていると、私の知らない深い知識を授業に織り交せて生徒を引きつけていることに感心します。その度にもっと勉強しなければと痛感させられています。また、限られた授業時間で受験指導をしつつも、教科書にとどまらない生徒の好奇心をくすぐるような知識を盛り込む——このバランスがとても難しいと感じています。

研修を通して、授業の仕方も変わりました。以前は教科書とチョークだけで授業をしていましたが、今はプロジェクトで画像を見せながら説明するなどの工夫をしています。最近の生徒には問題文から立体を想像するよう

な力が不足していると感じていました。そこで視覚的に訴えかける手法を用いたところ、通常よりも生徒の理解は深まっているように感じました。忙しさからなかなか挑戦することが出来なかったのですが、この経験から改めて日々の授業の見直しが大切だと感じました。

これからの私

「外の世界」との橋渡しとなり 県外でも負けない力を付けさせたい

教科書外の指導にもこだわるのは、学習に限らず、人生においても広い世界があり、生徒にそれを知ってほしいからです。私自身、県外の大学に進学し、いろいろな地域出身の人々と出会い、文化的にも社会的にも沖縄との違いを体感しました。まさしく衝撃の連続でしたが、それは自身が大きく成長する糧となりました。生徒にも、親元を離れて県外に出て、たくさん体験を積み、さまざまな場所で活躍してほしいと思っています。それが人生を豊かにするだけでなく、地域の発展にもつながるからです。

県外に出た時に、気後れせずに周りとは肩を並べられるよう、私の知っている「外の世界」を伝え、学力や教養をつけさせることが、私の役目です。生徒の目を広い世界に向けさせる架け橋となるために、これからも私は生徒と一緒に学び続けたいと思います。

座談会

中学校内容の 「学び直し」の課題と実践 — 英語を中心として —

新学習指導要領に、「義務教育段階での学習内容の確実な定着」が明記された。
中学校時代の学習内容が身に付いていない生徒に対して、学校現場ではどのように対応しているのか。
英語の指導で中学校の内容の「学び直し」を実践している3人の先生方にお集まりいただき、
現状と課題、具体的な実践内容について語っていただいた。

あきらめていた生徒に 新たな希望を持たせる

谷口 まず、お二人から、高校入学時点における生徒たちの英語学力の状況を教えていただけますでしょうか。

小林 中学校の内容の「学び直し」を進める上で難しいのは、生徒たちの英語の知識がゼロではないということと、その必要理由により、中学校できちんと授業を受けられなかった生徒が少なくありません。それでも、中学校時代に学んだわずかな英語の知識が断片的に残っているのですが、それが頭の中で整理されていないため、その上に知識を積み重ねていくことが難しい。例えば、3単現のsと複数形のsの区別がつかない、あるいは複数にはsを付けるという断片的な知識から「We plays」と表記してしまう。未整理のまま頭に残っている雑多な情報を整理することが、英語の「学び直し」の指導の意義の一つだと考えています。

前田 生徒の国語力の低さも、英語の習得の障害になっているように思えます。文章を書かせても、一つの文章に別の話題が入り込んだり、楽しい、つまらないという以上に自分の感情を掘り下げて表現できなかつたり。英語の学習を通して、言語の基本的な構造を理解することも、「学び直し」の重要な役割ではないでしょうか。

谷口 生徒の学習意欲の面はどうでしょうか。私の印象では、算数・数学は日常生活において必要性を実感する場面が多いため、生徒にその必要性が受け入れられやすいと思います。しかし、英語は「出来なくても生活に困ることはない」と考えているように感じます。実際、国によっては、英語の力が、学歴以上に働く機会に大きく影響を与えています。日本の場合は仕事を選擇する場面で、また仕事を進める上でも、大企業でさえ英語が必要になる場面は少ないのではないのでしょうか。

小林 大学入試を受けない生徒であれば、なおさら英語を学ぶ必然性は薄れます。生徒たちを学びに



前田健次
Maeda Kenji

愛知県立鶴城丘高校◎全日
制。総合学科。4年制大・短大・
専門学校への進学率は5割強。



小林真人
Kobayashi Masato

愛知県立日進高校◎全日制。
普通科。4年制大・短大・専門
学校・就職と進路先は多様。



谷口勝彦
Taniguchi Katsuhiko

三重県立宇治山田商業高校◎
全日制。商業科・情報処理科・
国際科を設置。大学・短大・専
門学校への進学率は約6割。

向かわせるには、どうしても「定期テスト」や「単位認定」という現実的な必要性で動機付けているのが実状です。

前田 確かに、日常生活の中で英語の必要性を実感する場面は少ないかもしれませんが。しかし、多くの生徒が英語を話したいという思いは持っています。「学び直し」が必要な生徒の場合、「ひよつとしたら自分も話せるようになるかも」という淡い期待は中学校時代に打ち砕かれており、勉強しても無駄、出来れば英語の勉強はしたくないという思いに取りつかれている。高校での指導は、

そういう生徒たちに「自分たちにも出来る」という期待を持たせることから始めなければなりません。

「学び直し」の重要な役割

谷口 以上の課題を踏まえ、お二人の実践をご紹介いただけますでしょうか。

前田 私は高校入試レベルの英語学力の習得を当面の目標にしています。実践の柱は二つで、「日々の課題」で中学レベルの英語の文法や単語をマスターすること、音読中心の授業により基礎的なフレーズを体

で覚えさせることです。

「日々の課題」では、家庭学習として市販のドリルに取り組んでいきます。1日の範囲を決めて、課題チェック表（P.42図1）と共に朝のSHRで集め、その日のうちにチェックし、解答を挟んで返却します。現2年生は、1年次の秋から始めて、翌年の2月までに中3の内容を終わらせました。2年次は引き続き長文のドリルに取り組んでいます。

重要なのは10分間、20分間でもよいので、毎日取り組ませることで「学び直し」が必要な層の生徒には自学自習の習慣がないので、ま

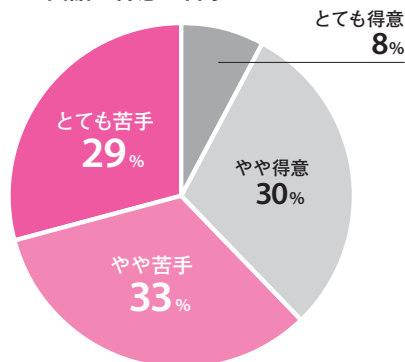
ずは家庭で机に座らせる習慣を付けることから始めなければなりません。ここで手を抜いてしまうと、生徒は学びに向かわなくなってしまう。また、量をこなすことで自信を持たせるのも重要です。1人当たり1年次にドリルを3冊、2年次は5冊、語数にすると11月時点で約1万9000語を読破しました。2万語を超えた時点で生徒に発表しようと考えています。

もう一つ、留意しているのは、日々の課題を通して生徒に「学習の仕方」を身に付けさせることです。ドリルに解答を挟んで渡す時、「参考

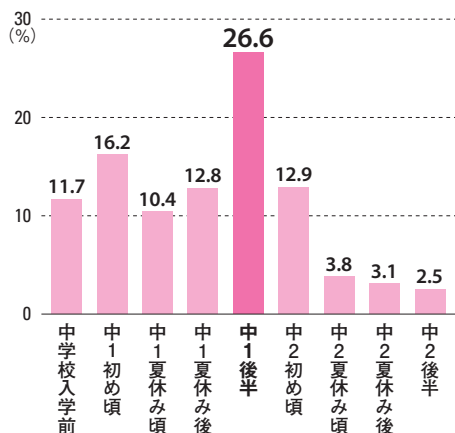
中学生の英語の得意・苦手意識

Benesse 教育研究開発センターの調査によると、中学生で英語を「苦手」と感じている割合は約6割に上る（グラフ1）。また、「苦手」と回答した生徒の中で、苦手と感じるようになった時期のピークは「中1の後半」であり、「中1後半」までに約8割の生徒が苦手意識を持つようになっている（グラフ2）。

グラフ1 英語の得意・苦手



グラフ2 英語を苦手と感じるようになった時期



出典：いずれも、Benesse教育研究開発センター「第1回中学校英語に関する基本調査報告書」（2009）より

図1 前田先生の実践「英語課題チェック表」

提出日	10月28日	10月29日	10月30日	10月31日	11月04日
提出範囲	NO. 1, 2	NO. 3, 4	NO. 5, 6	NO. 7, 8	NO. 9 --NO. 12
提出日	11月05日	11月06日	11月07日	11月10日	11月12日
提出範囲	NO. 13, 14	NO. 15, 16	NO. 17, 18	NO. 19	NO. 20, 21

今日は、中学時代のままになってしまった人が多い、「英検」や「英会考」や「英検」等が勉強できています。知らないところは先生に質問して、理解できるように頑張ろう。
正解を覚えるよりも、「どうしてその答えになるか」を理解できるかが重要なのです！

課題の内容は、総合基礎（英語）の2学期末考査範囲に含まれます。日々の努力の積み重ねが実力アップにつながります。毎日しっかり提出できるように頑張らしましょう。もしも出せない日があっても、前向きに考えて、次の提出範囲から出せば良いのです。とにかく勉強する習慣を作っていくところから始めましょう！

提出した生徒には押印をして返却する。実際は、漫画のキャラクターの決めゼリぶが判になったものが押され、それも生徒には好評だ。「出来ない日があっても、次からやればよい」と、生徒に負担を感じさせないスタンスで臨んでいることが分かる

書の○ページを見なさい」とメモにアドバイスを記したり、良い解答を出した生徒の答案のコピーを挟み込んだりします。学び直しが必要な生徒には、やり方を教えることも、実践の大きな狙いの一つです。

谷口 以上の「日々の課題」に加えて、前田先生は音読を多用したコミュニケーション型の授業を実践されているところが特徴です。

前田 授業ではリスニングやペアワークを多用し、和訳文は前もって提示してしまいます。ペアワークや

せる。その達成感こそが、次の学びへのモチベーションにつながると考えています。

「5つの小箱」で雑多な情報を整理

谷口 小林先生は、文の構造理解を重視した指導を実践されていると伺っています。

小林 本校では学校設定科目として、独自教材を使った「ベリッシュイングリッシュ」という授業を1学年で週2時間実施しています。先ほ

音読をしやすいように教科書の内容をアレンジした教材を使い、慣用句を繰り返し音読したり、文の切れ目を意識したスラッシュリーディング(注1)を行ったりします。日本語を聞けば英語のフレーズがすぐに思い浮かぶというくらいに、ひたすら音読をして頭にたたき込みます。徹底的に反復し、ある時教科書が読める自分に気付かせる。

文章の要素である、①副詞、②主語、③述語、④目的語・補語、⑤副詞の5つを、それぞれ「箱」に入れて整理することで英文を完成させます。私はこれを「5つの小箱(ファイブボックス)」(図2)と名付けています。我々も雑多なものを整理する時、ファイルにインデックスをつけて保存しますが、それと同じイメージです。

授業はプリント学習が中心です。プリントの左側には5つの小箱が空欄になっており、「私たちは彼を信じます」「彼らはあなたを助けます」といった簡単な日本語の短文を見ながら、そこに該当する英単語を当てはめていくという学習を繰り返します。

学び直しというと、中学校の学習内容を繰り返すイメージがありますが、一度つまづいた内容を、もう一度させても生徒は苦痛なだけです。そこで、1学期は一般動詞のみを扱

い、be動詞は2学期から、その後助動詞、完了形、進行形、受身形という具合に、生徒が混乱しないよう学ぶ内容を大幅に入れ替えています。2年次からは、1年生で行った内容でリスニングやオーラルコミュニケーションを行っていただきます。

谷口 英文の構造を視覚的にわかりやすく示すということ、正しい文構造をインプットした上で、プリント上で膨大なアウトプットを行うこと、この2つが先生の実践の特徴のようです。

小林 英文の構造を視覚化する利点は、単語を当てはめるべき場所を、ボックスの位置で覚えておけることです。我々も単語を覚える時、単語帳の右上にあったな、などと思いつかべることがあったと思います。また、ボックスの位置が決まっている、課題のスタイルが毎回同じであることも、生徒には安心感を与えるようです。必ずしも楽しい作業ではないと思いますが、まじめに取り組めば、たいていの生徒がテストでこれまで取ったことがないような高い点数を取れるので、何とかついてきてくれます。

注1 スラッシュリーディング:英文の意味上の区切りの部分にスラッシュ"/"を入れて英文を読んでいく方法



教科指導は団体競技 学校全体で相乗効果を

谷口 お二人の先生の授業スタイルは一見異なっているように見えますが、膨大な、しかも正しい例文や知識をインプットした上で、アウトプットを徹底する点では共通点があるように感じました。2013年には、スタートする新しい学習指導要領では、情報や考え方を「的確」に理解したり、「適切」に伝えたりすると

いう面が強調されています。正しい英文の習得を目指す先生方のご実践は、新学習指導要領の理念にも通じるものといえるでしょう。

では、最後に、学校で「学び直し」を実践する場合、取り組みを進めるためにはどのようなことがポイントになってくるのかということについて考えていきたいと思えます。取り組みを進める中で、現在課題に感じられることは何でしょうか。

小林 現在「5つの小箱」は、学校設定科目で実施していますが、これは私が学年主任だから出来たことかもしれないかもしれません。実践を充実したものにするためには、異動があっても、途中で中断されないように3年間を見通した計画性のあるものにしていかなければならないと思えます。「5つの小箱」は、教師個人の力量による指導内容の差を小さくし、標準的な「学び直し」ができる方法として取り組む価値があると思えます。

谷口 学校設定科目の活用については、新学習指導要領でも明記されていますが、他の教科との兼ね合いもあり十分な時間が取れるとは限りません。理想的には、学校全体で生徒

の課題、「学び直し」に対する認識や方法論を共有し、同じ生徒に対して3年間を見通した指導ができる体制をつくることが望ましいですね。

前田 進学校であれば、進学実績の向上で足並みをそろえ、教育困難校であれば、生徒を席に着かせるという課題の解決に向けて一致団結出来るでしょう。難しいのは、学力層の幅の広い学校です。そのような場面では、個々の先生方が地道に取り組みを継続し実績を上げることで、他の先生に「自分もまねをしてみよう」と思ってもらうことから、変革

が始まっていくのだと思えます。

谷口 「授業の内容がわからないのは、勉強しない生徒が悪い」では、学校の存在意義がなくなります。これからは学校として、わかってもうための努力をしていますのかということが問われてきます。どのような取り組みであっても、学校全体で取り組むことで相乗効果は高まります。教科指導は教科担当だけによる個人競技ではなく、団体競技であるということ、我々もつと認識しないといけないのかもしれない。本日はありがとうございました。

図2 小林先生の実践「5つの小箱」の最終形

完成 5つの小箱(ファイブボックス)			
0	1 主語	2 述語	3 目的語
どこ	〜は、が	〜は、が	〜に、を
いつ	あなたは	〜は、が	〜に、を
なぜ	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	彼女は	〜は、が	〜に、を
	あなたは	〜は、が	〜に、を
	彼は	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を
	彼らは	〜は、が	〜に、を
	私たちは	〜は、が	〜に、を

地方公立高校の挑戦

地域の高校が協力して
地域の生徒たちを育てる

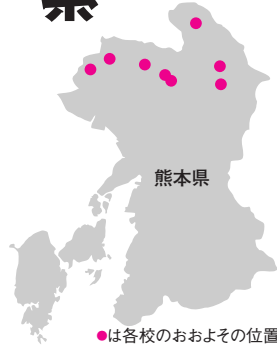
熊本県北に立地している、多種多様な八つの県立高校による進学連絡会がある。8校は、地域的に集中しているわけでも、進路傾向が共通しているわけでもない。そんな8校が、学校の枠を超え、教師皆で生徒を伸ばしていこうという機運を高め、今、連携の活性化に向けて動き始めた。

熊本県 八校連合進学連絡会

進路状況や学力向上策を 8校で情報共有

具体的な質問をした。中でも、学力は同程度であるにもかかわらず、自校の生徒が不合格になり、他校の生徒が合格したケースについては気になる話です。

規模や進学傾向の 違いを超え、 多校連携の活性化を模索



県北にある8校が 自主的に連携

八校連合進学連絡会（以下、八校連）は、熊本県北に位置する八つの県立高校による自主的な組織だ。学校規模も生徒の進路傾向も

さまざまである各校が、進路情報や取り組みを共有すると共に、1、2年生で年2回、3年生で年3回の「八校連模試」を開催している。八校連の事務局は持ち回りで担当し、期間は1年間、各校には8年に1度回ってくる。

各校の担当者は進路指導主事です。定例会議は年3回。進路指導主事に加えて、回によっては進路担当者ら1、2人が参加し、進路結果や夏休みの学力向上策など時期に応じた情報を共有する（図1）。

例えば、3月の会議では、同年1月末時点でのAO入試と推薦入試の合格状況を報告する。この時には、八校連模試の成績推移や部活動の状況などの情報も共有する。

高森高校の村上房親先生は、2009年度の入試結果を見ながら、他校に「どのような指導をしたのか」「持っている資格は何か」など、

図1 八校連の定例会議での情報交換内容

- 第1回** 5月
◎前年度の進路状況、当年度の学力向上策、課外の実施状況、模試の取り組み
- 第2回** 8月
◎夏休みの課外の取り組み・課題（期間、コマ数・時間・実施教科など）、就職・公務員試験指導、2学期の取り組み（課外・模試・勉強合宿、学力向上策など）、講演会
- 第3回** 3月
◎センター試験の結果、推薦・AO入試結果

Data

八校連合進学連絡会参加校

熊本県立阿蘇高校◎1学年約160人、普通科・商業科（情報ビジネスコース、国際観光コース）、4年制大進学率約30%

熊本県立大津高校◎1学年約320人、普通科・美術コース・体育コース・理数科、4年制大進学率約65%

熊本県立小国（おぐに）高校◎1学年約70人、普通科、4年制大進学率約23%

熊本県立鹿本（かもと）高校◎1学年約280人、普通科・体育コース、4年制大進学率約62%

熊本県立菊池高校◎1学年約320人、普通科・商業科、4年制大進学率約40%

熊本県立翔陽高校◎1学年約280人、総合学科、4年制大進学率約11%

熊本県立高森高校◎1学年約30人、普通科、4年制大進学率約9%

熊本県立南関（なんかん）高校◎1学年約40人、普通科（情報コース、美術工芸コース、スポーツコミュニケーションコース、ヒューマンコミュニケーションコース）、4年制大進学率約20%

「高森高校には若手教師が多いのですが、八校連にはキャリアが豊富で進路指導のノウハウを持つ先生方が大勢参加されていますから、勉強になります」（村上先生）

大津高校の鬼塚利博先生も、「合格した生徒は、どのような実力を持っていったのか気になります。合格出来る力とは何か、それに気付くチャンスでもあります。また、8校のある地域柄、似たような気質の生徒が多いため、より本校の実態に即した情報が得られ、参考になります」と、その意義を語る。

8月の会議では、夏休みの課外の期間や対象者、コマ数、時間、

実施教科などを細かく報告し合う（P.46図2）。09年度に初めて進路指導主事になった村上先生は、「以前は深く考えず、進路指導主事から指示された課外授業を聞いてい

ました。ところが、今度は自分が企画する立場になったので、何コマ実施するか、1コマ何分にするのかについて、この会で出たアイデアを取り入れながら計画を立てました。就職対策についても他校の先生に質問できるので参考になりました」と語る。

教師同士の交流も八校連のメリットだ。鬼塚先生は「八校連という媒介がないと出会えない先生もいます。八校連を通して、ネット

ワークが確実に広がっています」と指摘する。

約40年前に始まった 手作り合同模試が原点

八校連のルーツは、昭和40年代にまでさかのぼる。1968（昭和43）年、鹿本高校は旧・山鹿高校と統合した。これを契機に「県北の雄を目指そう」と、菊池高校との合同模試「菊鹿テスト」を開始した。両校の教師が協力し合っ

て生徒の学力を伸ばすと共に、問題を作り合うことによって教師の指導力を高めるのが目的だったという。

その後、学校の枠を超えて生徒と教師を育てる姿勢に共鳴した高校が1校、また1校と加わり、現在の八校連になった。小国高校や菊池高校などにも赴任経験がある阿蘇高校の衛藤繁校長は、当時を次のように振り返る。

「当時は進路情報は入手できませんでしたが、今のようにインターネットで簡単に収集できる時代ではありませんでした。教師の研修の機会も今ほど多くはありませんでした

から、情報を共有しながら若手教師を育成する良い場になっていたと思います」

進学傾向の違いが壁になり 進んでいった形骸化

ところがその後、模試は外部委託になり、今や、進路指導主事が集まって情報共有する場も八校連に限らず他にもある。八校連の存在は薄らぎ、形骸化が進んでいった。

また、八校連には大きな壁もあ



熊本県立大津高校
鬼塚利博
Ohtsuka Toshihiro
教職歴27年。同校赴任6年目。進路指導主事。英語科担当。「モントークYes, I can. And I will try.」



熊本県立阿蘇高校
吉田祐一
Yoshida Yuichi
教職歴25年。同校赴任5年目。進路指導主事。英語科担当。「自主自立・創造・共生」を軸に、生徒と向き合う」



熊本県立高森高校
村上房親
Murakami Fusachika
教職歴9年。同校赴任3年目。進路指導主事。英語科担当。企業勤務後、教師に。「失敗を恐れずに突き進んでほしい」

った。各校の進学傾向の違いが大
 きい点だ。大学進学者が大半を占
 める高校もあれば、就職や専門学
 校進学者が大半を占める高校もあ
 る。全校生徒数も1000人強の小
 規模校から10000人近い学校ま
 で幅広い。必ずしも各校の関心の
 高い情報が共通しているわけでは
 ない。

鬼塚先生は、「いろいろな事情の
 高校が集まるからこそ得られる利
 点があります。就職する生徒が多
 い学校でも、大学進学者がゼロで
 はありません。進学校にも就職希
 望者はいます。例えば、就職希望
 者向けに開く講演会で、人間とし
 ての在り方や生き方を伝えられる
 ような講師は誰が良いのかなど、

進学校にはない情報を得ることが
 できます。しかし、そうした多様
 な学校が集まるからこそ得られる
 メリットを十分に生かされてい
 なかった面はあります」と話す。
 だが、08年度に事務局を務めた
 大津高校の白濱裕校長（当時、小
 国高校校長）が大学教員を招聘し
 て講演会を開くなど、それまでに

「八校連でも情報交換にとどまらず、
 何かやらねば」と、すかさず動い
 た。2年生の合同学習会を企画し、
 八校連の各校に参加を呼び掛けた
 のだ。題して「8校合同学習会〜
 Pleasure in Study〜」。年度途中で
 八校連主催の事業を立ち上げるの
 は困難だったため、阿蘇高校主催
 で11月に開いた。吉田先生は、「本
 校の2年生の学習意欲が例年にな
 く低かったため、本校の生徒に刺

図2 進路指導状況の報告シート

学校名		進路指導状況の報告シート		
熊本県立阿蘇高等学校		生徒総数 464名/クラス数 14クラス		
夏 休 み の 取 組 み ・ 演 講 ・ 課 題	*夏休みの課外の取り組み状況・課題について（開講・対象生・コマ数・時間・実施教科等）			
		1年 (進学クラス・希望者)	2年 (職型日・希望者)	3年生 (職型日・希望者)
	期間	前期 7/21~7/31 後期 なし	前期 7/21~7/31 後期 8/17~8/20	前期 7/21~7/31 後期 8/17~8/20
	コマ 数・時 間・実施 教科等	70分×3 国・数・英	70分×3 国・数・英	70分×5 国・数・英・地理・公民・理科
	そ の 他・学習 会の実 施等	オープンキャンパ スへの参加	高校生チューター 8/19 オープンキャンパ スへの参加	合同学習会 8/3~8/6(地域進路重点校合同学習会)
今 後 の 課 題	内容の充実 課外に対する意識 付け	内容の充実 課外に対する意識 付け	科目ごとの時間の調整 自学への意識付け	
就 職 ・ 公 務 員 考 査	就職希望者数：48名(内、県内40名程度)		指導：面接指導 就職学習会(週2回)	
	本年度の求人状況：応募人数350件(昨年568件) 県内255件・県外325件 (県内県外40件・県外528件)		指導：個別指導 自衛隊希望者は地連の学習 会へ参加	
2 学 期 の 取 組 み	課外・検定・進路個別等の取り組み		学方向上としての取り組み	
	<ul style="list-style-type: none"> 早朝登校・夕課外・土曜講座 模範試験 面接指導(進学・就職) 小論文指導(進学) 		<ul style="list-style-type: none"> 授業の充実、授業の公開 生活の記録の活用 模範書の充実 個別指導 	
演 講 会	*進路講演会を実施した(予定している)学校はご記入ください。日時、対象、講師・演題等 ・1年進路選択講演会 7月8日 氏「進路選択について」 ・延命講演(10月10日・1、2年進学希望者・8講座) ・蘇光会4th「ザ・ゴ」(11月11日・1年全員・講師8名の予定) ・トップオブ・ブロードウェイがガム(土曜講座の時間割に講演会を実施) ・1年進路別講演会 1月。その他、進学講演会を1回実施予定。			
其 他 事 項	特にありません			

8月の第2回の定例会議での進路指導状況の報告シート。各校が定型フォーマットに取り組み内容などを記入し、情報交換する

**八校連で合同学習会を開き
 生徒同士が刺激し合う**

9年8月の連絡会で、事務局を
 務める村上先生は、先進的に学校
 間連携を進める他県の高校教師に
 よる講演会を企画・開催した。
 この講演会を聞いた吉田先生は
 「八校連でも情報交換にとどまらず、
 何かやらねば」と、すかさず動い
 た。2年生の合同学習会を企画し、
 八校連の各校に参加を呼び掛けた
 のだ。題して「8校合同学習会〜
 Pleasure in Study〜」。年度途中で
 八校連主催の事業を立ち上げるの
 は困難だったため、阿蘇高校主催
 で11月に開いた。吉田先生は、「本
 校の2年生の学習意欲が例年にな
 く低かったため、本校の生徒に刺

激を与えようと企画しました。好評だったら、次年度からは八校連の事業にしようと考えました」と打ち明ける。

内容は、予備校講師による国数英の授業と外部講師による講演だ。7校から計約150人の2年生が集まった。席順は、高校別にまとめずに、全員の名前の五十音順にした。

「こんな参考書を持っているんだ」高森高校の生徒は、隣に座った他校の生徒の机に置かれた参考書を横目で見て、自分のものとは全く違うことに気付いたという。高森高校の2年生は33人で、4年制大進学希望は3人。阿蘇山南麓に位置する高森高校の生徒が学校帰りに通える予備校は周囲にない。

村上先生は、「部活動の練習試合と同じように、他校の生徒の姿を見て学ぶことがあります。周りに入試に向けて切磋琢磨し合う仲間が少ない本校の生徒にとっては、良い刺激になりました」と話す。

合同学習会に参加した生徒にアンケートを取ったところ、90%以上が「やる気が高まった」と答え

た。阿蘇高校の生徒からは「せっかく集まったので、もっと生徒同士で交流する機会が欲しかった」との声が上がったという。各校の生徒がそれぞれの立場で刺激を受けたようだ。

「他校生と机を並べることによる『生徒の変化』は、多くの先生が実感していて、10年度は八校連主催での実施が見込まれています」（吉田先生）

例年、1月の大学入試センター試験の2日目には、八校連のうち4校で「大学入試センター試験リアルチャレンジ」を開いている。これは、センター試験の実際の国数英の問題に時間差で2年生が挑戦する企画だ。これまでは県の地域進学重点校に指定されている阿蘇高校が主導していたが、10年度のセンター試験からは八校連主催に切り替え、八校連全体に枠を拡大して行った。

足りないところを補い合う 緩やかな連携を目指す

郡部の学力の高い中学生が都市部の進学校に流出するのは、熊本

県も例外ではない。郡部の過疎化や少子化といった社会的な課題は学校教育を超えたものだ。

だが、鬼塚先生は「それでも現状を受け止め、生徒の進路目標を達成できる学校づくりをしていかなければなりません。各校が足りないところを補い合い、それぞれの持ち場で得意分野を生かしつつ支え合っていくことが大切です」と強調する。

熊本県は10年度から、現行の8学区制から3学区制に移行する。中学生の進学動向がどのように変わるのか、各校の危機感強い。

村上先生は、1年間の八校連の事務局期間を2年間にすることを提案する予定だ。そうなれば、高森高校が09年度に続いて10年度も事務局を務めることになる。「任期が1年では、運営業務に追われて終わってしまうのが現実です。当初はどうすればよいか試行錯誤の連続でしたが、これまでの経験を生かして、2年目は8校の現状やニーズを踏まえながら発展的な活動をしたいと思います」と話す。

吉田先生は八校連のメーリング

リストを作った。学校訪問や各校の取り組みなどの日常的な共有化を図るためだ。既に、他校訪問の情報を伝えた吉田先生は、「公開できるものは公開し、互いにWin-Winの関係をつくりたいと考えました。あまり強制するような形にするよりも、『緩やかな連携』とするのが長続きする秘訣だと思います。教育の世界は失敗が許されない面がありますが、かといって怖がっていたら何も始まりません。まずは取り組んでみて、問題が出てきたらそれに合わせて変えればよいのです」と前向きだ。

鬼塚先生も、「今は、各校が情報を積極的に発信する時代だと思えます。特に郡部にある学校間では、模試の結果で競争をするのではなく、地域全体の教育力向上が課題です。だからこそ、お互いに協力出来ることがあるのだと思います」と語る。

村上先生曰く「なぜか生命力だけはある不思議な会」である八校連――。約40年間続いてきた八校連の存在意義を問い直す、試行錯誤はまだ始まったばかりだ。

層分けした「指名補習」の実施が今後の目標

本校でも学力下位層対策に課題があるので、12月号の特集の広島県立広高の実践に共感した。「授業第一主義」を掲げ、偏差値40台後半の層を50台中盤までに育てる方針には納得した。今後、本校でも「指名補習」の実施を考えたい。成績上位層には個別添削指導で早期に受験への意識を高め、中位層には授業と面談を通じて意識改革と学校中心主義を浸透させる、下位層にも授業と小テストの提出徹底により基礎力を養成する。このシステムづくりと、学年・教科に理解を得ることが大切だと改めて感じた。

〔新潟県立新発田高校・江川真〕

成績下位層の生徒への指導が進路指導のカギ

学力下位層の抱える生活習慣上の問題が、他の生徒に悪影響を与える場合がある。進学実績を上げようと考えた時には、とかく成績上位層に目が行きがちだが、下位層の指導をしっかりとしないと、学年全体の意欲を下げ、ひいては学年全体の進路指導や進路実績に響いてくる。この認識については、学年団の中でも議論を進めているところだ。

〔茨城県・匿名希望〕

教師の指導継承のためのストーリーも必要

12月号の指導変革の軌跡の茨城県立竜ヶ崎第一高校のように、教職員の異動に左右されない指導スタイルを確立することはすべての公立高校の課題だ。生徒用の進路ストーリーばかりでなく教師用のストーリーが描かれることで、継続可能な進路指導が出来るようになるだろう。また、同校では筑波大に狙いを定めている。これは、「竜

読者のページ

VIEW'S SQUARE

Volume 6

教育最前線からのホットな話題を紹介します

ヶ崎第一高校に入学出来たならば筑波大に一步近づくと」という進路保障や生徒の意欲にもつながると思う。

〔静岡県・匿名希望〕

「あきらめかけた生徒の学習意欲を高める」という姿勢で面談に臨む

12月号の生きたデータの徹底活用。「あきらめかけた生徒の学習意欲を高める」という視点は良かった。現任校でも、11月模試の帳票返却時の面談の研修として、面談の必要な生徒を想定し、典型例のロールプレイングを行った。生徒の学習意欲を高めるために、担任が生かしてくれることを期待している。

〔千葉県立佐原高校・田中三郎〕

学校の「ワイガヤ」こそが教師を育てる

私たち40代教師が、20代、30代の頃は職員室や校務分掌の部屋で、先輩方と「ワイワイガヤガヤ」と話をしながら学んでいたように思う。今は、そうした時間がないほど業務が多く、若手教師を構ってあげられない状態だ。しかし、私たちが経験した「ワイガヤ」や校内研修などを多く行っている学校こそが活性化していると思う。私たちミドルリーダーが今後もっと頑張っていかなければならないと感じた。

〔大阪府立八尾翠翔高校・中村泰造〕

教師川柳

教うれば学ばぬ子なし春を待つ

大阪府・清風高校・松永恵一

「VIEW21」へのご意見・ご感想を Benesse教育研究開発センターのウェブサイトからお寄せください

下記の手順でアクセスしてください。

- ① 「Benesse教育研究開発センター」のトップページの「情報誌ライブラリ」の「高校向け」のプルダウンメニューをクリックしてください。
- ② 画面右端の「VIEW 21」の表紙の下にある「読者アンケートにご協力をお願いします」をクリックしてください。
- ③ 入力フォームが表示されますので、ご記入の上、送信してください。

<http://benesse.jp/berd/>



編集後記

先日、取材したある先生から、「VIEW 21は、教師をつなげる情報誌だね」というありがたい言葉をいただきました。「テーマが現場の課題とマッチしているので校内の先生方との会話のきっかけになる」「登場する熱い先生方会ってみたいくなり、訪問するきっかけになる」ということでした。今後も、VIEW 21を通して、先生方が「つながる」きっかけになるような情報をお届けしていきたいと思います。(松平)

VIEW21 2月号 Vol.6

2010年2月9日発行

発行人 新井健一
 編集人 原 茂
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター
 印刷製本 大日本印刷(株)
 編集協力 (有)ペンダコ
 執筆協力 中丸満、長谷川敦
 撮影協力 川上一生、松原誠

VIEW21編集部
 〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー22階
 電話 03-5371-1238

©Benesse Corporation 2010

VIEW21

2010
April
4月
Volume 1

次号は
4月1日発行(予定)
「VIEW21」高校版は
年6回の発行です